

# 一貫道について

窪 徳 忠

- |          |         |
|----------|---------|
| 一 序 文    | チ 術 語   |
| 二 一貫道略史  | リ 儀禮と儀式 |
| 三 教義     | 四 修行と戒律 |
| イ 道名の由來  | イ 三 寶   |
| ロ 三期末劫思想 | ロ 修 行   |
| ハ 五教歸一思想 | ハ 戒 律   |
| ニ 理氣象の三天 | 五 經濟と布教 |
| ホ 崇拜對象   | 六 經 典   |
| ヘ 解經法    | 七 結 語   |
| ト 扶乩     |         |

## 一 序 文

秘密結社の存在を無視しては政治を行うことができないとさえいわれるほど、中國史上において秘密結社の果たした役割は大きく、中華人民共和國——以下中共と略稱する——においても、その對策は大きな政治問題の一つとされている。成立日なお浅い中共治下に、多くの秘密結社が存在するであろうことは、今日の中國全般の政情に照して考え

ても當然のことと首肯されるであろう。ところで、私にとつてきわめて興味深いことは、秘密結社の中でも、古くから民衆の間に信仰されていた宗教を紐帶とする宗教的秘密結社が、中共政府に對してとくに根強い反抗的態度を示していることである。中共政府は宗教的秘密結社を反共ゲリラの一つに數え、その對策に腐心しているようである。昨今の新聞の論調や、中共治下を視察した人々の歸朝談では、反共ゲリラは全くなく、宗教政策はきわめて順調に進んでいると報ぜられているけれども、實は宗教的秘密結社はまだ残存しており、秘かに工作を行つていようである。中共治下に残存する宗教的秘密結社の名稱と實數とを正確にあげることは不可能であるが、私の知るかぎりでも相當數にのぼっているから、中共の政策によつて漸次減少しつつあるであらうけれども、實際にはまだまだ多いといわなければならないまい。それらの中で、最も大きな勢力をもち、最も強力な反抗的態度を表明しているのが、ここにとりあげようとする一貫道である。

日華戰爭中、華北の地方には多くの宗教的秘密結社があり、さかんに宣傳活動を行つていたが、とくにいわゆる淪陷地區即ち日本軍の占領していた地方で――それも主として農村であるが――大いに力を張つたのが一貫道であつた。戰爭中にとつた一貫道の態度については、相反する二つの説がある。一は中共側の人々の説で、これは、日本軍の手に先になつたとし、戦後は蔣政權と手を握つた賣國分子、反動分子だといふのである。これに對して Rev. W. A. Grooteaerts は日本に反對した最大の組織であり、戦後は蔣政權から敵意を示めされた結社だとのべられておられる。<sup>(1)</sup> 同氏の指導をうけた李世瑜氏も、民國三十二年にスパイの嫌疑で數名の一貫道徒が天津の日本憲兵隊の手で逮捕され、投獄されていた事實を指摘している。<sup>(2)</sup> 最近このことに關して Grooteaerts 氏に訊したところ、氏は、天津・南京地方の一貫道徒は大體において日本と協力していたが、山西・チャハル方面では協力せず、大同では民國三十三年に日本軍から迫

害された。日本軍の旗色が悪くなると盛になり、勝勢が續くと衰えた。民國三十三年から翌年にかけて最もさかになつた。三十五年には道徒の數がへつたけれども翌年からまた勢をもちかえした。戦争中は日本軍の占領していた地方にさかんであつたが、中共軍の治下には道徒の姿は見られなかつた。蔣介石は、戦争中道徒が日本軍と協力したことを理由に、一貫道を壓迫した。といわれた。このような相反する二説のどちらが正しいかわからないけれども、地方的に多少の差があるにもせよ、恐らく全體的には日本軍に對しては反抗的態度をとつていたのではなからうか。協力したと伝えられていた地方の道徒にしても、恐らくは面従腹背であつたであらう。それは一貫道のもつ教義からいつても、農村の自衛團體的なその性格からいつても、ほぼ想像されるところである。中共に對して反對するのは、民國三十六年より翌年の初めにかけて、北京の一貫道徒が扶乩のお告げによつて中共軍の進攻を末劫來として非常に恐怖し、大いそぎでその準備をはじめたことによつても想像される (Grooteaers 氏談)。その態度は一貫して中共成立後におよび、中共の強力な彈壓をうけている現在でも、なお相當根強い反抗を續けているのである。<sup>(3)</sup>

一體秘密結社の研究は、その對象の性格からいつて、きわめて困難である。現在各方面からさかんに研究されている太平天國や白蓮教についてさえも、まだ未解決のいくたの問題が残されているようであるが、それも當然のことである。いわんや實際に調査しうる立場におかれていない我々が、現存の宗教的・秘密結社の研究を行うことなどは、全く不可能である。従つて現存の諸秘密結社に關する研究は、少くとも私の知るかぎりにおいては、ないようである。ところが誠に幸いなことには、私は前記 Grooteaers 氏の御厚意によつて、輔仁大學で氏の指導をうけた李世瑜氏の「現在華北秘密宗教」という書を閲讀する機會を與えられた。本書は李氏が自ら結社員となつてつぶさに體驗されたところの報告であるから、誠に貴重な史料といわなければならない。<sup>(4)</sup> その上畏友吉岡義豐氏からは、その所藏にかか

る數種の一貫道の根本經典を借覽する厚意をうけた。これらの厚意に勵まされて、専心一貫道の研究にかかったが、やはり史料の不足からくる不便と缺陷は覆うべくもなく、結局兩氏の御厚意に副えない單なる外貌の紹介に止まらざるをえなかつた。しかも私の淺學のために、本稿は主として李氏の著に基く一貫道の紹介となつてしまつた。その點諸賢にお詫びをするともに、誤りや不足な點について御教示を賜らんことを切望してやまない。なお、一貫道を始めとする現存の宗教的秘書結社と中共との關係については、本稿と切離して「東洋文化」第十一號に發表したから、參照されれば幸いである。

## 一一 一貫道略史

一貫道の創立時期および開祖については、他の宗教的秘書結社の場合と同様、はつきりしたことはわからない。文獻の所傳や道徒の言もまちまちであり、李世瑜氏も推測に止つている。このような點の究明はある意味では無意味であるが、宗教的秘書結社がこの點をいかにして道徒にのべるかという一例として、また一貫道の歴史性をさぐる一つの手がかりとしてとりあげるならば、あながち無意味ではないと考えて、あえてとり上げることにした。まず道徒の言に耳を傾けよう。

一貫道は天地開闢以前に存在してはいたが、當時は隠れてあらわれなかつた。天地が開け、盤古氏が現れるにおよんで一貫道もまた世に知られた。盤古氏の時は年代があまりにも古く、記述もない。しかしその當時の人々が獸面だつたけれども佛のような純善な心をもち、性は天と通じていたことがわかつてゐる。だからこの時代は、いわば活佛

の時代であつた。そうして一貫道の道脈はこの時に始まる。ついで燃燈古佛——一名錠光佛または定光佛——の化身である伏羲氏に傳わつた。伏羲氏の姓は風、木德をもつて王となり、日月の明るさにも匹敵する聖德をもつていた。つぎが黄帝有熊氏で、姓は公孫、名は軒轅。水德をもつて王となり、廣成子の引導によつて一貫道の奥義を授けられた。つぎが帝堯陶唐氏。帝嚳の子で尹祁氏ともいう。堯は「十六字の心法」——くわしくは後述するが、唯一の道理を示す口訣である——を舜に授けたので、道統は舜に傳わつた。舜は有辛氏で黄帝八代の孫である。つぎが姓を妣、字を商密といい、鯀の子禹である。禹は金德をもつて王となり、舜から「十六字の心法」を授けられて道統を嗣いだ。が、時あたかも青陽期の末期に當つており、天は劫を下した。それが史上に有名な洪水である。禹は命をうけて九河をつくつて洪水を収めた——青陽期や劫は一貫道の主要教義の一つである三期末劫思想關係の言葉なので後述に譲る——。つぎが子姓で名を履癸とよぶ湯である。湯は夏を伐つて民の苦しみを救い、天下が彼に歸したので道統を嗣いだ。この時が紅陽期の始めである。つぎが姬姓で名を昌といい、如來古佛——釋迦——の化身である文王である。彼は天命をうけて紅陽期の大道即ち一貫道を掌り、いわゆる文王の八卦をつくつて道旨を發揚した。「十六字の心法」は、木德をもつて王となつた文王の子發即ち武王をへて、周公に傳えられた。周公は名を相といい、武王の子である。周公ののちは老子をへて、水精子の化身である孔子に傳わつたが、道統が王者を離れて儒士に傳えられるようになったのは、孔子をもつて最初とする。つぎは名を參、字を子輿という、その弟子曾子である。孔子は彼がよく道に通曉しているのをみて、「一貫心傳」を授けて道統を嗣がせた。大學は彼の著である。つぎは孔子の孫で中庸の著者である子思である。曾子について學び道統をついだ。つぎが子思の弟子孟子である。彼は名を軻、字を子輿といい、孟子七篇を著わして儒教の眞理を發揚した。

孟子の後には「十六字の心法」をうけつぐべき人物がなかつたので、儒士による道統は絶えてしまつた。秦・漢・晋・隋・唐をへて、議論紛々として落着くところを知らず、宋がおこり、陳搏や周子などをはじめとする儒士が輩出したけれども、ついに道統をつぐには至らなかつた。ところが大道は實は孟子以前より西方に傳わつて、釋敎の徒によつて繼承されていたのである。即ち釋迦以後その弟子達によつて、左の如く二十八代達摩まで道統が續いた。

第一祖 釋迦牟尼 姓は刹帝利、父は淨飯王、母は摩耶夫人。周の昭王二十六年四月八日母の右脇から誕生し、說法すること四十九年、周の穆王五十三年に七十九歳で死んだ。

第二祖 摩訶迦葉尊者 大龜氏、老波古仙人と號した。釋迦の弟子となつてその說法を集めて經典とした。

第三祖 阿難尊者 姓は刹帝利。父は斛飯王。釋迦成道の日に生れ、その弟子となつた。

第四祖 優波鞠多尊者 吒利國の人。

第五祖 提多迦尊者 摩伽陀國の人。

第六祖 彌遮迦尊者 インドの人。

第七祖 波須密多尊者 北天竺國の人。

第八祖 佛駄難提尊者 迦摩羅國の人。

第九祖 伏駄密多尊者 提迦國の人。

第十祖 脇尊者（婆栗濕縛ともいう）インドの人。

第十一祖 富那夜奢尊者 華氏國の人。

第十二祖 馬鳴大士 婆羅奈國の人。

第十三祖 迦毘摩羅尊者 華氏國の人。

第十四祖 龍樹大士（那伽闍羅樹那ともいう） 西天竺國の人。

第十五祖 迦那提婆尊者 南天竺國の人。

第十六祖 羅睺羅多尊者 迦毘羅國の人。

第十七祖 僧迦難提尊者

第十八祖 伽耶舍多尊者 摩提國の人。

第十九祖 鳩摩羅多尊者 大月氏國の人。

第二十祖 闍耶多尊者 北天竺國の人。

第二十一祖 婆修盤頭尊者 閼城の人。

第二十二祖 摩拏羅尊者 那提國の人。

第二十三祖 鶴勒那尊者 月氏國の人。

第二十四祖 師子尊者 中インドの人。

第二十五祖 婆舍斯多尊者 罽賓國の人。

第二十六祖 不如密多尊者 南インドの人。

第二十七祖 般若多羅尊者 東インドの人。

第二十八祖 菩提達摩尊者 南天竺の人。

達摩が梁の武帝の時中國に渡來したので、一貫道の眞機は再び中國に戻つてきた。道徒はこれをとくに「老水還潮

と稱して、達摩を初祖とし、以後道脈は相傳えて第十八代祖師張天然に至つた、としている。その道統はつぎのとおりである。

菩提達摩 姓は刹帝利、胡成古佛の化身である。初祖として異常な崇拜を集めている。關係の故事や傳説が甚だ多い。

神光二祖 俗姓は姬氏、諱は神光、號は神光慧可。燃燈古佛の化身である。

普菴三祖 俗姓は余氏、諱は普菴、號は僧璨鑑知。靈寶天尊の化身である。

曹洞四祖 俗姓は司馬氏、諱は曹洞、號は道信大醫。天皇尊者の化身である。

黃梅五祖 俗姓は黃梅氏、號は大滿宏（弘）忍、凌霄金童の化身である。

慧能六祖 俗姓は盧氏、諱は慧能、號は大鑑慧能。地藏王の化身。六祖壇經一部をのこした。

六祖ののち大道は「火宅」即ち在家に傳わるることになつた。五祖が六祖に夜ひそかに衣鉢を傳えた際、とくに、道脈を絶滅させてはいけなさが、さりとて惡僧に傳えないよう注意しなければならぬと遺囑した。果せるかな、六祖はのちに惡僧から衣鉢を傳えるように強迫されたので、機を窺つて秘かに脱出し、廣東の曹溪に奔つたが、追及の手がのびた。幸い田中で白玉蟾にあつて救われ、その家に迎えられた。そこで六祖は玉蟾に衣鉢を授け、後また馬端陽にあつて正法を授けた。ここにおいて釋家による道統は終りをづけ、再び儒家によつて繼承されることになつた。これは密機で、僧侶には知らされてないから、壇經にはのせてない。慧能以下の道統は左のとおりである。

白玉蟾七祖 號は白衣居士。三月十四日に生る。南嶽大帝の化身である。

馬端陽七祖 慧能から正法を授けられたので玉蟾と並んで七祖となる。號は道一居士。西域第十二祖馬鳴大士の



化身である。四月九日に生る。

羅蔚群八祖 羅公遠の化身。北直隸涿州の人。正月八日に生る。

黃德輝九祖 元始天尊の化身。江西饒州府鄱陽縣の人。

吳紫祥十祖 號は靜林。文昌帝君の化身。康熙十三年八月十三日、江西撫州府金谿縣に生る。

何了苦十一祖 號は若道、九天斗母の化身。乾隆年間に江西廣信府貴溪縣三板橋に生る。誕生日は三月九日である。

袁退安十二祖 號は志謙または無欺。元始天尊の化身。乾隆二十五年五月十三日に貴州龍里縣に生る。

楊還虛十三祖 號は守一、觀音古佛の化身。嘉慶元年七月二十三日に四川成都府新都縣に生る。

徐還虛十三祖 袁退安の度をうけたので、楊と共に十三祖とする。號は吉南。彌勒古佛の化身。乾隆八年八月七日に四川成都府新繁縣に生れた。

徐・楊二氏の後は衆魔が天上で争つたために道統は混亂し、天命がはつきり受けられなくなつたので、上天はやむなく先天の五老や仙佛聖眞に命じて、下生してしばらく道統をおさめさせることにした。その五老はつぎの通りである。

陳祖火精 號は玉賢。先天五老中の南方赤精古佛の化身である。成都府新都縣の人。二月二十七日に生れ、五行の火部に關する道務を掌る。

宋祖木成 先天五老中の木公の化身。湖南長沙潭州城で五行の木部に關する道務を掌つた。

安祖土道 先天五老中の中央黃老古佛の化身。湖南長沙寧鄉縣で五行の土部に關する道務を掌つた。

彭祖水德 號は浩然。滄海覺眞子、儒童素一老人ともいう。先天五老中の水精古佛の化身。湖北沔陽の人。五行の水部關係の道務を掌つた。誕生は十二月八日。

林祖金秘 號は金元。玉山、崑園ともいう。先天五老中の西方金老古佛の化身。嘉慶九年六月二十六日叙州府隆昌縣に生れ、五行の金部關係の道務を掌つた。

同治十二年四月十日死に臨んで林金秘が弟子たちに、今後はただ代理をおくだけで祖といわぬようにと遺言したので、その後しばらくの間は道統をつぐ者は何代の祖と稱さなかつたけれども、天命によつて道統は秘かに西蜀華陽の林智垣、古壽道新、三希堂の牛公道一と伝えられた。その後は仙佛聖眞と五老の「分性」とが心を同じくして道務を攝掌した。その名はつぎの通りである。

依果 依微 煉性 奇善 明新 修德 致恭 淨持 致讓 良仕 良玉 依專 海川 定選 黃謙 忠恕 伊正 道玄 道生 道相 道基

この後道統は秘かに山西の姚鶴天に伝えられ、また脈絡がついた。彼以後の祖師はつぎの通りである。

姚鶴天十四祖 山西の人であること以外は詳かでない。

王覺一十五祖 號は北海老人。山東青州の人。西乾堂姚祖の弟子となり、東震堂の祖師となつた。著書が甚だ多い。

劉清虛十六祖 山東北海南岸に傳道したこと以外は詳かでない。

路中一十七祖 彌勒古佛の化身。この時から白陽期に入つたので、白陽初祖ともいう。民國十四年歿。その後は一時觀音古佛の化身である陳師姑が道務を掌つた。

張光璧十八祖 號は天然。弓長祖師ともいい、白陽二祖である。民國十九年に道統をついだ。

以上が道徒の語る一貫道の道統である。この中には伊祁氏である堯を尹祁氏とし、有虞氏舜を高辛氏として黃帝八代の孫とし、湯の名を先祖の名契と合して履契とし、武王の弟である周公をその子としたことなどをはじめとする明らかな誤りや、土徳の黃帝を水徳とし、道のインドへの傳播徑路などをはじめとする多くの不可解な點、後にのべる教理と矛盾する點など不備なところが多いことは、ここに一々指摘するまでもあるまい。なお、大學を曾子の編としたことは、一貫道に朱子學派の影響のあることを示す一例として注目をひく。秘密結社の傳承であるから、右の諸點のあることは當然であり、論ずるだけの價值はないと考えられるから、それらのこまかい指摘や訂正は一切省略し、一貫道の性格検討に必要と考えられる問題だけをとりあげて考えてみる。

第一に氣づくことは、盤古より孟子までは、人名のみをあげて何代の祖と名づけず、釋迦より達摩までは禪宗でいうインドにおける祖師の系譜をそつくりその儘かり來つて西域の祖師とし、達摩以後張天然までに一貫道の祖師と名づけたことである。盤古より孟子までを順位をつけずに並べたことは、古えの聖天子と聞えたもの、および孔子以下の儒家のうち朱子學系統のものを選んで適宜あげただけであるから、後述の五教歸一の思想の理由づけおよび朱子學の影響をあらわすにすぎず、實は一貫道の道統とは關係がない。釋迦以下達摩までもまた同様である。もし關係があるならば、盤古を第一祖として張天然まで一連の順をつける筈である。また盤古と後述の一貫道の最高神たる無生老母との關係もとかれていない。だから關係なしと斷ぜざるをえない。達摩から慧能までは、中國の禪宗の系譜そのままであるから、これまた五教歸一のためにかり來つたものにすぎない。従つて慧能以前も實際には一貫道とは何ら關係がない。ただここで、一貫道の教理をつくつた者は、朱子學と禪とに通じていたに相違ないことを注意しておきた

い。つぎに、第七祖とされている白・馬の二人については問題がある。前文には六祖で釋家による道統は終り、その後は儒によつて繼承されるようになったといいながら、略傳のところでは釋家の如くにのべている。これも小さな矛盾であるが、二人はどちらも儒でも釋でもなさそうである。元末以後、道教は南北二宗にわけられるようになったが、その南宗に屬する道士に同名の白玉蟾なる者がいる。それは海瓊、海南、瓊山道人などと號し、陳楠、字は南木、號は翠虛、泥丸真人の弟子である。金丹道に通じ、符籙をよくして祈禳を行い、吉凶をあてた。南宗の寧宗ごろの人である。<sup>(6)</sup> また馬端陽については馬祖道一のようにとかれていたが、道一は慧能の弟子南嶽懷讓の弟子であつて、慧能に面識もなかつたらしい上に端陽と號した形跡もない。ところで、道教の北宗に屬する全眞教團の第二代祖師は馬丹陽という。彼は全眞教の開祖王重陽の隨一の高弟で、全眞教團の育ての親ともいふべき有力な道士であつた。<sup>(7)</sup> 誕生日は五月二十日で、道徒のいう四月九日とは異なるけれども、丹陽と端陽の音の似ていること、同じく全眞教團の道士である王重陽や邱長春が一貫道の崇拜對象とされていることから、馬端陽は馬祖道一ではなくして、全眞道士馬丹陽であろうと考えられる。そうして白玉蟾も道士とすれば、第七祖とされた二人は道教の南北二宗から一名づつとられていることになり、釣合もよい。しかも大道は「火宅」に傳わることになつたと道徒側もいつている。この「火宅」を道教と解釋すれば、道徒の説明とも吻合することになるので、道徒の説明は誤りと考える。

このようにして白・馬兩七祖以前が一貫道とは何らの關係もないことは明らかとなつた。しからば一貫道の開祖は何人であろうか。つぎにこの點を明らかにするのを目的としつつ、以後の歴代祖師とされた人々について考えてみる。けれども第八祖羅より楊徐十三祖までの祖師の實體は詳かでない。各人が夫々神佛の化身とされ、具體的な事跡が傳わらないから、或は實在の人物ではなかつたのかも知れない。つぎの先天五老およびその「分性」についても同

様である。「分性」とされているものの名がほとんどすべて善や徳を示す普通名詞らしく感ぜられることも、實在を疑わせる一つの理由である。それはとにかく、道徒のとき「道」の傳授は、ここで非常に混亂し、祖師をたてられなかつたのであるから、この以前も慧能以前と同様、現在の一貫道とは直接の關係はなかつたと思われる。従つて一貫道の萌芽は姚鶴天以後とすべきである。ところが道徒の言にも、他の文献にも、姚鶴天の事跡は明らかでない。ただ一貫道理問答に、西乾堂の祖師だつたとみえるだけである。だから彼もまた一貫道とはあまり關係がなかつたであろう。

姚の弟子の王覺一の事跡は、やや明らかにすることができる。一貫道理問答には、一體、一貫大道の傳承は、古くから單に口授のみによつてきたが、道光初年からは普度を開くようなめぐりあわせとなつた。その場處が西乾堂であり、王覺一はその弟子であつた。西乾堂の祖師即ち姚鶴天が死に臨んで香をたいて乩示を請うと、瑤池金母が乩諭して、堂名を東震と改め、覺一にその執領を命じた。すると西乾の高弟たちの多くは、あえて天命に背こうとはしなかつたけれども、覺一が東震堂の祖師として西乾の後をつぐことを大いに不滿として、その下につくことを肯んぜず、それぞれ別に堂名をたてて獨自の門戸をはるようになった。彼らは經典を讀誦し、色戒をたて、神前に祈つて布教に従事した。一方覺一はこの間にあつて、理數合解、子曰解、一貫探原、闡道文などをはじめとする多くの書を著わして天命の負荷に應えた。彼が死に臨んで乩示を請うと、東震の名を三極一貫と改め、劉清虛に執掌を命じた、とみえている。一貫道疑問解答にも、十五代の祖王覺一が死に臨んで乩示を請うと、東震の名を一貫と改めよとの乩諭があつたので、道名を一貫とするようになった、とあるが、歴代祖師源流卷三の記述はやや異なる。即ち、姚より秘かに道を傳えられた覺一は、當時道統が混亂しているのをみて、天道がすたれて衆人がよるところに迷うのを悲憫する

と共に、教えが傍系に流れて正道が失われるのを恐れて、多くの書を著わして性理の心法を明らかにし、かつそれによつて愚者を啓蒙し、智者には益々その才をのばさせ、世を善化し、民衆を救うことに専念した。彼が光緒十年三月、天津で歿後、劉清虛が十六祖となつて東震堂と名づけた、とあつて、東震なる堂名は清虚の時に名づけられたとして<sup>(8)</sup>いる。それはとにかく、右のように覺一の傳はほぼ明らかにすることができる上に、その著書は現在重要な經典として道徒から重視され、記述の内容も現行の一貫道の内容と一致するところがあるから、以上の記述に従えば、彼は一貫道の基礎を築いた重要な人物とみななければならない。

しかも曾國荃の著人種の中には

王覺一別號半仙。自少年以算掛爲生。並扶乩畫符爲人治病。後在直隸山東各地設教騙人。妖言惑衆。官府剿拿甚嚴。終落法網。斬首示衆。二子及其黨羽均皆逃匿。<sup>(9)</sup>

との一句がある。これによつて覺一はある一派の創立者であり、後官に捕えられて斬首されたことが判明する。この記述は、當時道統が混亂し、彼が一派の首領となつたとのべている一貫道關係の所説とも暗合する。だからかりに彼のたてたという一派が一貫道であつたとすれば、覺一が一貫道の創立者となるわけである。ところが現在の一貫道では符や治病はあまり重要視しない上に、その著とされている多くの書には、一貫道の最も重要な教義の一つである三期末劫の思想がとかれていない。この思想の詳細は後述するが、一言でいうならば、天地開闢以來現在までを青陽・紅陽・白陽の三期にわけ、各期末に天から劫が下されて世界が破壊されるが、現在は白陽劫が目前に迫っている時だといふのである。ところで、道統中では、白陽初祖は路中一とされている。もし覺一が三期末劫思想を容れていたのであれば、必らず自己の時代を白陽劫の時とし、自己を白陽の祖としなければならない筈である。にも拘らずそのことに

ふれていないのは、彼の時にはまだこの思想を容れていなかった、換言すれば、彼は一貫道の祖師ではなかつたといわなければならない。しかも彼の著書として知られている一貫概言には、<sup>(10)</sup>ずつと後輩である張天然を師とよんでいる個所がある。これは明らかな矛盾であると同時に、覺一が一貫道の祖師でなかつた鐵證であろう。やや推論がすぎるが、現在彼の著として伝えられるものの多くは、恐らく後人が彼の名に假託したか、もしくは彼の著であつたものに手を加えたものに相違なからう。覺一は當時相當な勢力をもつた一派の創立者ではあつたであろうが、その一派は一貫道ではなかつたであろう。そして後に彼の名を一貫道がかりて、自家藥籠中のものにしたのである。彼の説にいても同様なことがいえるが、その點は後述する。その上陳捷の義和團運動史には

或謂總首領曰王覺一。居四川。天津人則謂。祖師居四川峨嵋山。今已二百餘歲。或謂實卽石佛口王姓。<sup>(11)</sup>

との一句がある。ここにいう王覺一が一貫道の王覺一と同名異人ならば問題はないが、もしも同一人であつたとすれば、彼は義和團の首領であり、「人種」にいう「設教」とは、義和團の別派であつたとしなければならぬ。そうしてそれを一貫道がかり用いたとすれば、一貫道は義和團の系統をもひいてることとなる。しかし義和團の宗教的呪術的な面の根本は、シャマニズムと道教とくに正一教系統に屬する治病や符籙の使用とにおかれて<sup>(12)</sup>いるから、直接の關係はきわめて薄いといえよう。従つてますます覺一と一貫道との關係は薄くなるのである。要するに覺一は現在大いに重視されてはいるものの、實際にはあまり關係がなかつた人間としなければならぬ。なお覺一の適確な年代は明らかでないが、すでに明代から他の宗教結社には三期末劫思想がとり入れられているから、彼が容れていないのは不可解である。

王覺一の後を嗣いだといわれる劉清虛、およびつぎの路中一については、前にのべた程度のことしかわかつてい

ないが、張天然の傳は歷代の祖師中で最もくわしく判明する。しかしそれはあまりにも傳説化、神秘化されているので、具體的な點になるとはつきりしないが、一幹部の話や文獻の所傳を綜合してその略傳をのべてみる。

彼は名を光璧、字を天然といい、山東濟寧の人であるが、生年はわからない、初め晴耕雨讀の生活をしていたというから、彼の生家は豪農あるいは富農であつたと想像される。成人したのち、彼は濟南にて、先明德という鹽や油などを賣る雜貨店の主人になつた。この儘何事もなければ、恐らく彼は一介の雜貨店主として平凡な一生を終つたのであるが、上天は彼をその儘にはしておかなかつた。ある時彼は路中一にあつてその迷いを指摘されたので、飄然と悟り、以後求道に専心し、ついに心法を授けられて一貫道中の人となつた。この入道の動機について、偶然か、人生問題について悩んだ結果か、あるいは經濟上の問題があつたのか、はたまた社會的な原因か、一切のべられてないのでわからない。入道後の彼は日夜中一の膝下を離れず親炙したらしく、中一が諸方に行脚に出る時には、必らず隨行するのが常であつた。中一が歿した民國十四年以後は、中一の命を奉じてその後の道務を攝行した陳師姑を補佐していたが、乩示によつて民國十九年以後、陳師姑に代つて十八代の祖師として自ら道務を掌ることになつた。ある布教師の言では、彼が十八代祖師となつたのを民國十七年とし、李氏も同年とするが、天然の自作である暫定佛規——一貫道經典の一——の序文には

治至庚午年間。正逢天降大考。竟蒙吳以重任。余自思何德何能。敢膺此命。當卽再四懇辭。以讓賢路。詎料皇母降鸞各壇。不允所請。余只得勉爲其難。順天行事。然而三曹齊渡。責重任巨。受命以來。夙夜惶恐。

とあるから、民國十九年が正しいであろう。同年上天即ち無生老母は、普く三曹——在天の仙佛、地上の人間、および地下の幽冥鬼魂を三曹という——を度そうという一大慈悲心をおこして、人々に三期收圓の劫數を示したといわれ



ている。けれどもその後の數年間の状態について、ある布教師は「大道は時に顯われ、時に隠れた」と形容しているから、天然が道務を掌つた直後の數年間は、あまり人々に迎えられなかつたといつてよからう。なおここで一寸注意しておきたいのは、民國十九年に上天が人々に示したといわれている三期收圓の劫數が王覺一の著といわれる一貫概言にでていることである。これは恐らく、民國初年のある一貫道徒が、覺一の名に假托してのべたものであらうから、覺一の著といわれるものが、どれだけ實際にその手になつたものか、餘程慎重に考えて取扱うことが大切である。

さて天然嗣教直後あまり振るわなかつた一貫道は、民國二十五年以後急激に發展し、河北・山東などの華北地方はいうに及ばず、長江流域から甘陝などの邊境地帯にまで道徒の姿がみられるようになった。民國二十五年といえば、日華の關係がすこぶる切迫し、年末には西安事件があり、その翌年には蘆溝橋事件の勃發をみた年である。従つて世情はすこぶる安定をかいていたころといわなければならない。こういった際に一貫道が急に勢力をえたことは、當時の政治情勢や社會状態と結びつけて考えなければならない意味がありそうであるが、それについては後にふれるつもりである。とにかく天然は日華戰爭中に縦横の活躍をして、民國三十六年九月二十九日に世を去つた。生前から道徒の彼に對する尊敬ぶりは甚しかつた。その昔天子の諱をさけ、もしくは直接にその名をよばなかつたと同様に、師尊——教首の意——・師傳、または「張」字をわけて弓長祖などよんで本姓をよばず、文書に寫す場合には別に一行を起して、天然師傳・弓長師傳・師尊・老師などとかいた。弓長とよぶのは、彼が無生老母から三曹を普度し、最後の結末をつけるために地上に遣わされた濟公活佛の倒裝下凡したものと自稱したので、道徒がその本姓をよぶのをさけるために案出したものである。ここに、中國史上を彩っている多くのいわゆる教匪の首謀者の行き方と軌を一にするようなにおいが感ぜられてならない。なお弓長というところから、天然を明代の寶卷流宗教の一派である圓頓教の祖

の弓長と關係があるかにとくものもあるが、これは誤りであろう。ただ、張を弓長とつけたこと、および最後の結末をつける使命をもつとくのは、恐らく圓頓教のそれに學んだのであろう。彼に對するこのような尊敬ぶりは、次第に彼を神秘化していつた。彼は早くから、救劫菩薩の化身で普通の人間ではないと考えられていた。また彼が赴いた際に止まるべき行宮——彼の宿舍を道中ではこういう——が各地に多く作られていたが、彼の行動について、いつ、どここの行宮で、何をしているか、適確に知つてゐる者は、側近を除けば極めて少なかった。従つて、一般の道徒はもちろん、極めて信心深い道徒でも、甚しきは幹部級の布教師でさえも、彼の姿をかいまみることは至難のわざであつた。そのため益々神秘化されて、ついにはその風貌について、

師尊生得堯眉舜目。慧眼雙瞳人。常似閉目守玄。睜開則神光奪目。額間尙有一隻大眼立生。龍鼻聳直。冠頂如蠟。準頭豐隆。口開唇紅。五絡長髯。精神百倍。兩耳垂肩。手過雙膝。龍步虎行。飄飄灑灑。真是超塵出世。氣度非凡。並且兩手掌心天生的左日右月硃砂紅痣。將手一拍。印透千張紙。兩脚又有紅砂硃痣。左脚心北斗七星。右脚心南斗六星。因彼爲濟公活佛。爲三曹真主。才有如此福德貴像。雖處塵世。而靈光超出天外。與宇宙同體。

凡吾人一切活動。彼全能知。<sup>(14)</sup> 云云

とまでいわれるほどになつた。これではまるで神そのものである。

このように考えてくると、一貫道の創立者は張天然とせざるをえない。大體一派を創立した當初から大きな勢力を獲得する教團または宗教結社は極めてまれであつて、少くとも數年間は微々たる勢力しかもてないものである。天然の嗣教後數年間は「大道時顯時隱」の状態であつたことは、それに吻合する。彼は路中一の後をついだといい、中一を彌勒の化身として白陽初祖とよび、自分を濟公の化身として白陽二祖と名のつてゐることは、彼の時に三期末劫思

想をとり入れて一貫道を創立したとしなければならない。それはさきに紹介した連綿たる道統と矛盾した説が別と  
かれてゐるからである。即ち三期末劫思想によると、無生老母は人間界の文化を向上させるために、九十六億の自分  
の子供たちを下生させた。彼らは一應その責任を果たしたものの、次第に物欲にそまつて墮落したので、三期の各終末  
に大道を下して子供たちを引上げることにした。現在はその第三回白陽期の期末に當り、下されるべき大道が一貫道  
で、それを掌るのが天然だといふのである。だから以前には一貫道は存在せず、白陽末期に始めてこの世に出現した  
としなければならない。然らば當然天然が一貫道の創立者でなければならないわけである。この兩説の矛盾は、恐ら  
く後説が最初にでき、その歴史と傳統ある旨を道徒に誇示する一法として、つぎに前説がつくられたのであろう。し  
かしこの點について深く論ずることは、單に推測を重ねるだけに止まり無意味だから、やめ、矛盾の指摘にとどめて  
おく。また一貫道の重要な經典は、王覺一の著および民國八年の序のある家郷信書を除けば、他はすべて民國二十年  
以後のものである。覺一の著書については前述した。一體一貫道の經典には、萬國道德會、同善社、先天道、世界紅  
卍字會などの他の宗教的秘密結社のそれを流用したものが多し。歴史が新しいから當然のことであるが、同時にあま  
り内容が相違しないためでもある。家郷信書の内容は、人々が佛規を守らず老母の教えに背いたので、老母は彌勒を  
下して賢良を度そうとしている。だから人々は老母の教えを守り身をつつしめば永遠の幸福がえられる、というので  
ある。だから或は他の結社からかりたものかも知れず、或は序文のみを年代を遡らせてつけたのかも知れない。何れ  
にせよ、一貫道の根本經典ではなからう。また天然のみが極めて神秘化されていることも、彼が創立者だつたことを  
示す一證であらう。要するに、一貫道は民國十年代の終りごろ、天然によつて創立されたものといつてよからう。<sup>(15)</sup>し  
かしこういつても、天然が無師で創立したといふことではない。路中一と表現されている者から、何らかの教え

をうけ、それを元にして従來のさまざまな信仰や宗教的秘密結社の内容を合様して、一貫道を創立したのであるうと考えられる。<sup>(16)</sup> 結局一貫道はきわめて新しく結成された宗教的秘密結社であるが、その内容的な源流は古い。つぎにその源流を求める意味をもふくめて、一貫道の教義などの内容を紹介しよう。

### 三 教 義

#### イ 道 名 の 由 來

道中においては、「一貫道」という文字に對する解釋は教義の一つに數えられているほど重要視されているので、教義をとく前に、まず道名の由來とその意義につき、簡単に説明しておく。

一貫道には解經法とよぶ經典の特異な解釋法がある。その中で論語里仁第四篇第十五章子曰。吾道一以貫之。曾子曰。唯。を、「孔子は、自分の今傳えるところの道は一貫道だ、といったのに對して、曾子が、わかりました。誠に結構です、と答えた」と解釋する。この解釋に基き、一般には、一貫とは孔子の命名によると眞面目に信ぜられ、孔子を一貫道徒と考えている。かかる子供だましの附會はとにかくとして、一貫道新介紹では、道名およびその由來をつぎのように説明している。

天地のはじめは、何とも名づけることのできない無臭無聲の、渾然とした一つのかたまりであつた。のち伏羲氏が先天の八卦を畫した時、これを圓で表わした。ついでまた一畫して天地をわけたので、圓の代りに「一」で表わすことにした。そこで圓を○または一で寫すことにした。その後老子が無極の説をのべ、孔子は一貫という言葉を使つた。

一體天地開闢以前は形がなく、これを表わす方法がないので、しいて圖で表わすことにし、その意を文字では無極といつたのである。圓をのばせば一になるから、後には「一」字で圓を表わすことに定つた。従つて「一」字は無極を表わす圓の變象なのである。原理的にそのわけを説明すると、無極は天地を育生する能力と、森羅萬象を包む意義をもつてゐる。無極の屬性は靜で、一の屬性は動だから、無極が本體で一がそのはたらきといふことができる。無極が一たび動けば、そのはたらきによつて萬物が生ずる。靜にして動かなければ眞の空だが、動いて萬物を生ずるから全くの空ではない。だからそのはたらきである一で本體の無極を表わしても差支えない。そこで一を萬物の根源、萬物の主宰とする。また數學に例をとれば、零は數の源で、一は數の始めである。零が動けば一を生じ、一から萬數が成立する。萬數はみな一から始まり、一をすてれば數は成立しない。この理から推せば、萬物は一から生じ、すべて一から離れることができない。大にしては宇宙、小にしては一物まで、みな一が主である。このように、物という物は一切一から生じ、みな一に基いて成立しているから、一は無極の眞、先天の妙であるが、一貫道の一はこのようなものである。このように至神至明だから、一は別に理とも名づけられる。この理はみてもみることができず、きいてもきけないが、實は物の本體である。だからこの理は天地萬物を貫徹しており、一切の天地萬物はすべてこの理をそなえている。そこで一貫といふのである。

然らば道とはなにか。道とは路である。我々が歩くにも、もし路がなければ寸歩も進むことができない。それと同様、我々の生活にも路が必要である。しかしこの場合の路には正・邪の別があり、正路を行けば善を行うことになるが、邪路をとれば惡を犯してしまう。正路とは、理に合した行動や生活することである。理に合するとは、生活にとつて正しい軌道である理への合致である。この軌道から外れた行動が不合理である。正しい軌道とは、生と共にあ

る本能即ち本性である。だから本性にそつた行動をすれば自然正路によつてゐることになり、本性から外れた行動をとれば軌道から外れた邪路をとることになる。軌道から外れれば危険が續出する。もし、地球がその軌道から外れれば四時は不順となつて萬物は生育せず、汽車が脱線すれば車體は破損し旅行者は負傷する。人間が邪路をとれば全く同様の結果を生ずることは、説明を要すまい。この正道を示すのが一貫道である。だから一貫道は天地萬物を育生する大道であり、人生行路上當然ふみ行ふべき常理である。理論的にいえば哲學で、老子の「玄之又玄」に相當し、別の面からいえば科學でもある。道の奥義を精査すれば、一貫道が科學の本源であることが明らかにならう。世間では哲學は科學の母というが、正にその通りである。要するに、天地萬物で一貫の大道から出なかつたものはない。と。なお一貫道疑問解答にも、同様の趣旨が今少し簡明にのべてある。

右の説明を一言でいえば、天地を貫徹する理を根本思想とすることによつて、一貫道と名づけたことになる。右の説明には、奇妙にして愉快な附會がままあるが、朱子學的傾向と禪宗的解釋とから成立つてゐることが明らかである。だから一貫道の命名者は、相當な學識をそなえた人であつたに相違ない。張天然には恐らくこれほどの學識はなかつたであらう。やや推論がすぎるが、恐らくは清末の官僚豫備群の一人で佛教の素養もあつた人が、その命名者であつたらう。しかし現在ではその人の名はわからない。

### ロ 三期 末劫 思想

以下一貫道の主な教義について紹介するが、その第一にあげなければならないのが三期末劫思想である。天地開闢以來の歲月を青陽・紅陽・白陽の三期にわけ、各期末に劫が下つて世界が根本的に破壊され、惡人が亡ぼされるとくこの思想は、現存の宗教的秘結社のほとんど大半がもつてゐるといつてもよいほど、極めて普遍的であるが、一

貫道ではつぎのようにいう。

一貫道がうまれたのは「先天」即ち天地開闢以前のことであるが、そのころは世に知られていなかった。天地創造の主である無生老母は、天を作り地をひらいた後、寅會——後述——の初めにあつて人類をつくつたが、彼らは火の使用法を知らず鳥獸を生のまま口にし、穴居生活をするなど、その生活は禽獸と何らえらぶところがなく、世を治めることもできず、人であつても人でないような状態にあつた。いわば形だけは備つたが眞の意味の世界が成立してないことをみた老母は、大いにあわれを催して、自分の子供である九十六億の佛子を地上に遣わしてとくに中國に下生させ、人類にさまざまなことを教えてその文化的水準を高めさせることにした。これらの佛子は、原來子といい、原子とも略稱するが、原子下生のことがあつて以來、中國には原子の化身である有巢氏、燧人氏、后稷、神農氏、軒轅氏、倉頡氏、伶倫氏などの諸人士が輩出して、禮を定め樂を作り、諸制度をつくつて、人々に人間らしい生活を送らせるようにしたので、ここに世界の文物は大いに進歩し、具備するようになった。だから文化の進歩發展は、原子下生のお蔭である。ところが時がたつにつれて、下生した原子は他の悪い人々の影響をうけて、彼らと同様に物欲のとりことなり、次第に本來の靈性を失つてしまつた。そこで老母は、ついに九十六億の原子を自分の手許によび戻して將來永遠に幸福を享受させようと決心し、大道を下して彼らを救うことにしたが、これは容易なことではなかつた。そこで老母はある時期に地上に劫罰を下して世界を破壊し惡人を滅ぼす一方、同時に大道を下して善人即ち原子たちを救うことにした。その時期が、過去においては、天地開闢以來の時間を三つにわけたうちの第一期の青陽期および第二期の紅陽期の各終末期であつた。それを青陽劫および紅陽劫という。紅陽期のつぎの第三期が白陽期である。青陽劫は伏羲の時代、紅陽劫は周の昭王の時代にあたるが——道統中の説明では禹の時を青陽劫にしている。かかる矛盾

は他にも多い——、その兩劫の時には毎回僅か二億づつの原子しかよび戻せなかつた。だから現在なお九十二億の原子がこの世にいるわけである。そこで老母は第三期末即ち白陽劫の時には、残り九十二億の原子を一舉に手許によび戻そうと決心した。その時期が即ち現在である。各劫にはこの世が破壊され、原子および同時に下された大道に入っている者以外の、物欲のとりこになつている者一切は滅ぼされてしまうが、劫は饑餓、疾病、洪水、旱魃などさまざまな災害の形をとつて現れる。これらの劫を掌る魔王があり、青陽劫では阿魔靈王、紅陽劫では魔王陽虎だつた。白陽劫の魔王名はまだわからないが、これらの魔王は悪人を殺す直接的方法と同時に、殺生を戒め、善行を勧める逆な方法をとる場合もある。そうして白陽劫では九十二億の原子を一舉によび戻そうとするのだから、従前の二劫とは比較にならぬほど極めて烈しい破壊がくる。この破壊を免れるには劫と同時に下る大道に入るのが唯一の方法であるが、この大道こそ一貫道である。一貫道は過去の二劫でも下されたから、都合三回この世に現れたわけである。そうして魔王と同様各期の大道を掌る古佛があり、青陽劫では燃燈古佛、紅陽劫では釋迦文佛であつたが、白陽劫では彌勒古佛である。各古佛はみな人間界に下生化身して現れる。現在の大道の降下は最後である。一貫道が目下大いに普度を開いているのはそのためである、と。なお一貫道には理氣象の三天があり、各劫には氣象二天が壊れるとされるが、それについては後述する。また一貫道は白陽劫の時に現れるとよく矛盾した別説もある。

以上が一貫道のとく三期末劫思想の概略である。これは天地創造と一貫道の出現とを説明し、併せて多くの道徒を獲得する布教の一方法でもあるが、この思想が彌勒下生説に基くことは、一讀して明瞭である。そこでつぎに彌勒下生説が三期末劫思想に發展した徑路を考えてみる。

インドに起つた彌勒信仰の詳細はすでに先學の精緻な研究があるから、ただ、生前大いに尊崇をうけた彌勒が後に



佛教思想の發達につれて觀音や文殊などのような理想佛の一種と考えられるようになったこと、將來現世に出現して有縁の衆生を救済解脱させる使命をもつ者だとの記を釋迦から授けられたとされること、その結果人々の厚い信仰をえて彌勒六部經といわれる六部の經典が作られたこと、のちに中國や日本にも傳わつたことだけをのべておく。

さて彌勒下生經が竺法護によつて初めて華譯されたのが西晋の武帝（二六五—二八〇）の時であり、四世紀の始めには釋道安の信仰をえているから、中國における彌勒信仰はすでに南北朝の初めからあつたとしなければならない。中國における彌勒信仰は人のよく知るところであるが、三期末劫思想との關連を指摘する關係上、彌勒下生經<sup>(17)</sup>によつてごく簡単に説明しておく。

佛が舍衛國祇樹給孤獨園にあつた時、阿難が、彌勒が出現する將來久遠の時の有様について質問すると、佛はつぎのように答えた。「將來久遠の時にこの國に城郭が現れ、土地は豊かに人民は熾盛となる。その時城中に水光という龍王が現れる。そうして山河石壁などはみな自然になくなり、地は鏡のように極めて平整にして清明となる。四大海の水は一萬を減じ、穀物は豊かにみのり、數多の甘美な果樹が生えて香氣を發し、諸々の珍寶は多く、穢惡は自然に消滅する。時氣は和適し、四時は節に従い、人間には百八の苦患や貪欲瞋恚などの煩惱がなくなり、八萬四千歳の長壽を保つようになる。人心は均しくなつて、多くの珍寶を手にながら、昔の人々はこのような珍寶のために傷害しあい、無數の苦惱をうけたが、可愛いそうなものだ、と話しあうようになる。その時轉輪法王が出現して正法をもつて世を治め、四大寶藏が自然に現れる。この時にあつて兜率天にいた彌勒は、その轉輪法王の大臣夫妻が年よりすぎもせず、若かすぎもしないのをみて、神を下して大臣の妻の右脇から生れるが、これは自分が母の右脇から生れたのと同じである。大臣は大いに喜んで、その子に彌勒と名づける。彌勒は成人してのち出家學道して成道し、大衆を率

いて鷄足山に登つて迦葉から僧伽梨をもらい、これを身につけ、初會に九十六億人、二會に九十四億人、三會に九十二億人を度す（龍華三會）。そうして諸弟子のために無常想などの十想をといたのち、壽八萬四千歳で滅度するだろう」と答えた、と。

以上が彌勒下生經にみえるところのごく概略であるが、彌勒出現の際の理想郷は一貫道の理天——後述——にあたり、三會の度人數を換骨脱胎したのが、原子の總數および白陽劫によび戻される原子數である。また三期末劫思想で前二劫の際におよびかえされた原子の數を二億づつとしているのは、毎回の度人數の差からの思いつきに相違ない。

さて彌勒の出世は五十七億八千萬歳という久遠の將來であるが、その時には上に聖王あり、世は文字通りの樂園となるというわけであるから、人々とくに虐げられた境遇の人々や苦惱にみちた生活を送っている人々には、この説はうけ容れられやすい。南北朝のころ、佛教は中國社會の全般を通じて受容されたが、いわゆる上層の人々はいわば趣味または教養として受容れ、大衆は自分たちを救うものとしてその生活全體をもつて切實に受容れたと考えられる。従つて大衆にこそ深くかつ廣く受容されたというべきであろう。もつともその場合、佛教はその眞の姿を理解されたのではなく、中國的に、いわば道教的な要素を加えて受容されていることに注意しなければならない。だから民衆に受容された佛教とは、いわば道教的、民間信仰的な要素を加えたものであつたわけである。このような佛教を受容した人々、とくに北朝治下の人々は、北方民族の下で被壓迫民族として不幸な不満足な生活しか送ることのできない立場におかれていた。彼らとしては、現世の不遇や困窮を前世の業報とする陰陽思想によつて、やむをえないとして一應あきらめてはいたであろうけれども、やはり心中では常に長壽、富貴などの現世的利益を冀つていたに相違ない。彼らの心中を支配していたのは、古くからの傳統的な神の加護や救いによる自己の幸福の追求であつたらう。そこへ將來、

それも甚だ遠い將來ではあるが、この世に聖王が現れ、この地上に極樂さながらの樂園が出現するとよく彌勒信仰が齎られたのであるから、あたかも燎原の火のように忽ちの間に擴り、深く人々の心を支配するに至つたのは當然である。恐らくは悲願ともいふべき彼らの願いが、將來いつかは充たされるというのであるから、正に旱天の慈雨ともいふべき大福音でもあつたであらう。だからこそ、時の爲政者に不満をもつ者、もしくは野心家が、我こそは彌勒の化身である、我こそは轉輪聖王であるときと、人々は極めて單純にそれに動かされたのである。宗教的秘密結社が結成され、宗教的反亂が惹起される一つの原因は、こういつたところに求められるであらう。そうして事實、彌勒信仰は隋唐以後には多く反亂のために利用されている。

南北朝時代の末期にみられる、月光菩薩（童子）の再來と號した事件をはじめとする更生佛に名をかりる諸反亂は、いうまでもなく彌勒信仰に基き、後の彌勒教の反亂の前驅でもある。隋唐時代に彌勒教徒の諸反亂や武后の革命が起つたのは、彌勒信仰が廣く一般の間に滲透していた一例であるが、玄奘三藏が兜率天上生の信仰を鼓吹したことも、彌勒信仰の弘通に拍車をかけた。このころの彌勒信仰は末法思想と結びつき、初期の信仰とはやや傾向を異にしている。なお兜率天とは、彌勒が將來この世に出現するまで止つているところで、初めは一種の理想郷と考えられていたが、後には六欲天の一つに數えられるほど價值が低くなつた。

五代宋初には、彌勒を布袋和尚とする説および更生佛思想による定光佛の信仰が成立した。彌勒即布袋説とは、五代の後梁の末帝の貞明二年（九一六）三月岳林寺で遷化した布袋和尚が遷化の際に残した「彌勒。眞彌勒。分身千百億。是時示時人、時人俱不知」という偈によつて、彼を彌勒の化身とするようになった説であるが、これは彌勒下凡をのぞむ人々の氣持をあらわしたものであらう。それ以來布袋と彌勒とは不離の關係におかれて、彌勒は必らず布袋の姿

で表わされるようになった。現在察南晋北の萬全縣を中心とする地方に分布し、一貫道同様な三期末劫思想をもつ黃天道という宗教的秘密結社の一派では、祖師像を便々たる太鼓腹をつきだした布袋の形で表現し、一貫道の無生老母も同様である。定光佛の信仰は五代に現れ、宋以後盛になつた。定光佛は錠光佛ともかく。大智度論卷九によれば、定光佛は誕生した時に身邊から燃火のような光明をだしたので、燃燈佛の名をえたとあるから、別に燃燈佛ともいわれたことがわかる。現在の宗教的秘密結社では、みな燃燈古佛といい、定光佛とはいわない。定光佛と釋迦との關係について、修行本起經卷上には、提和衛國の燈盛という聖王は死に臨んで位を太子錠光に授けたが、世の無常を感じた太子は弟に國を譲つて出家して沙門となり、修行を重ねて成道した。これが錠光佛である。後錠光佛は各地を遊行してあるいたが、たまたま梵志儒童から華を供えられて大いに喜び、儒童に來世成道の記を授けた。その儒童が釋迦であるところとあり、一説では、燃燈佛は、釋迦が前世で修行の最中に第二阿僧祇劫の末に出現した過去佛で、釋迦に來世成道の記を授けた佛だともいわれている。要するに定光佛は釋迦に先行し、かつ將來成道の記を授けた佛とされている。だから三期末劫思想の中では、第一期の青陽劫の大道は燃燈が、つぎの紅陽劫の大道は釋迦が掌るとされているのである。なお燃燈佛を古佛というのは、過去に出世した佛の意である。五代宋初の定光佛信仰について、朱辨の曲洧舊聞には

五代割據。干戈相侵。不勝其苦。有一僧。雖伴狂而言多奇中。嘗謂人曰。汝等望太平甚切。若要太平。須待定光佛出世。始得。至太祖（趙匡胤）一天下。皆以爲定光佛後身者。蓋用此僧之語也。（卷一）

とか、

予書定光佛事。友人姓某者。見而驚喜曰。異哉。予之外兄趙蓋宗室也。丙午年春。同居許下。手持數珠日誦定光佛千聲。予曰。世人誦名號多矣。未有誦此佛者。豈有說乎。外兄曰。吾嘗夢梵僧。告予曰。世且亂。定光佛再出

世。子有難。能日誦千聲。可以免矣。吾是以受持。予時獨竊笑之。予俘囚十年。外兄不知所在。今觀公書此事則再出世之語昭然矣。此予所以驚而又悟外兄之夢爲可信也。公其併書之。予曰。定光佛初出世。今再出世。流虹之瑞。皆在丁亥年。此又一異也。君其識之。(卷八)

とあり、方勺の泊宅編卷中には、婺州に豚の頭をたべるので猪頭和尚とよばれた僧がいたが、辭世の頌をみて定光佛の化身であることがわかった、とみえ、十國春秋卷八十九には、泉州の僧行修は耳が長かつたので長耳和尚とよばれたが、實は定光佛の應身である旨を永明寺の僧延壽が錢俶に告げた、とある。清の俞樾はこれらの諸書の説をひき、かつ南宋の高宗を定光佛の轉生とすることをも指摘して、このころ定光佛轉生説の多いことに感心している。<sup>(19)</sup>正にその通りで、宋以後いかにこのような更生佛思想が盛んであつたかの一例である。けれどもこのころでは、この信仰と彌勒下生説とはまだ結びつかなかつた。定光佛信仰は定光佛と釋迦との關係を、彌勒信仰は釋迦と彌勒との關係を定めているから、この兩信仰をあわせば三期末劫思想となるのであるが、元末の韓山童などによる彌勒教の亂即ち紅巾の賊の場合でも彌勒下生説のみで、定光佛信仰は加わっていないようである。<sup>(20)</sup>この兩信仰が結合されたのは、私の知る限りでは、明代の羅組の無爲教などを始めとする諸寶卷流宗教においてである。そうしてここに始めて三期末劫思想が大成されるのである。たとえば破邪詳辨によれば、寶卷流宗教一派である收源教の古佛天真考證龍華寶經には

燃燈佛後。有釋迦佛接續傳燈。釋迦佛後。有彌勒佛接續傳燈。

とあり、黃天教の普靜如來鑰匙通天寶卷には

燃燈佛子。獸面人心。釋迦佛子。人面獸心。彌勒佛子。佛面佛心。

とあり、紅陽教の混元紅陽顯性結果經には

混元一氣所化。現在釋迦佛掌教。爲紅陽教主。過去青陽。未來才是白陽

とある。<sup>(21)</sup>この他清初の白陽教にもこの思想が現れているが、先天道・九宮道・黃天道などの現存の宗教的秘結社の

大半は、寶卷流宗教において大成された三期末劫思想をその儘うけついでおり、一貫道もその例外ではない。従つてこの思想の面からいえば、一貫道は直接には寶卷流宗教の系統を、間接には白蓮教の系統をうけついでるのである。なお義和團との關係は前述の通りであり、僅かに太上老君・關羽・姜子牙・周倉・諸葛亮などの崇拜對象を同じくする程度にすぎないから、ごく稀薄としなければならぬ。

## ハ 五教歸一思想

三期末劫思想について重要な教義は、儒佛道などの各成立宗教を合一する考え方である。一貫道が三教歸一の立場をとることは、前述の道統中の祖師によつて明らかであるが、ただに三教のみならず、キリストやマホメットまで扶此の時に此示するとして、キリスト教や回教をも入れて、五教歸一を標榜する。その上迷信とよばれるような民間の雜信も入っているのだ、萬教歸一と稱する場合もある。かかる態度をとるのは、正しい天命をうけて眞の道統を統率する使命をもつのは張天然一人であり、一貫道の道は萬教を貫徹すると考えるためである。李氏がある佛堂でみた

一點現天真 三曹齊渡

貫通明性理 萬教齊歸

なる對聯も右の考えを表わしたものである。このように五教または萬教歸一というけれども、實際は、三教の歸一が中心である。一貫道疑問解答には、これをつぎのように説明してある。

儒佛道の三教は、もともと一つの「理」からでたものである。だから門戸が分れ、説はそれぞれ違うけれども、實際に深くその精神を究めてみると、大體一つの理に歸着する。三教は時により、天運に應じて成立したものであるが、みな天に代つて理を宣化し、人心を救い、惡を善に化し、醜を良にするのを目的としている。たとえば、道家は虚無を本とし、保養虚靈を重視して無極に歸ろうとし、釋家は靜寂を根本とし、返觀靜寂を重視して雜念を除こうとする。儒家が明德を明らかにしようとするのは、私欲をやめ、純全たる天理につくそうするために他ならない。天理とは至善の意味であるが、また靜寂という言葉で表わしてもよい。靜寂は無極であり、無極が眞理である。従つて三教はすべて無極という一つの理から生じたもので、元を尋ればみな同じである。かつ三教の法を伝える方法は異るけれども、佛は萬法歸一、道は抱元守一、儒は執中貫一という點からみれば、みな一をもつて本源としており、一理が化して三教となつたことが一層明らかとなる。これはたとえてみれば、丁度人間の一身に精・氣・神があるようなものである。現在三教が歸一するのは收圓の現象であつて、本源に歸ろうとするためである、といつてゐる。

また醒世週刊第一期所收の五教圓通經義には、五教歸一について、木火土金水の五行が五大洲に散布して五種の民族になつたけれども、もとは一佛性であるから、萬國は一理であり、世界は大同だと前置して、つぎのように説明している。

儒——存心養性、執中貫一を重視する。始祖は孔子。主要經典は大學・中庸。道號は聖同子。須彌四洲でいへば須彌中洲に、現在の洲にあてればアジア洲である。色は黃、方位は中、五徳は土。黃老の後にあたる。

釋——明心見性、萬法號一を旨とする。始祖は如來文佛。主要經典は般若心經・金剛經。道號は舍利子。須彌四洲の南瞻部洲に、現在のアフリカ洲にあたる。色は紅、方位は南、五徳は火。赤精子の後である。

道——修心煉性、抱元守一を旨とする。始祖は太上老君。主要經典は道德經・清靜經。道號は菩提子。須彌四洲

の東勝神洲に、現在のオーストラリア洲にあたる。色は藍、方位は東、五德は木。東王公の後である。

耶——洗心移性、默禱親一を旨とする。始祖はキリスト。主要經典は舊新兩聖書。道號は獨生子。須彌四洲の西

牛賀洲に、現在のヨーロッパ洲にあたる。色は白、方位は西、五德は金。西王母の後である。

同——堅心定性、清真返一を旨とする。始祖はマホメット。主要經典はコーラン。道號は清真子。須彌四洲の北

炬芦洲に、現在のアメリカ洲にあたる。色は黒、方位は北、五德是水。水精子の後である。

このように儒以下の五教を五行思想にあてはめて解釋した擧句、これらを統一するのが醒世天道即ち一貫道であるから、一貫道はすべての宗教を包攝し、統一するとのべている。誠に奇妙にしてユーモラスな解釋ではあるが、いままなお五行思想が宗教的秘密結社に生きたものとしてとり入れられ、一般の人々がこれを無批判に受容れるところに深い興味が感ぜられる。

このように三教、五教または萬教歸一と號すると、當然これらの中でどれが最高か、道徒はどれを重視すべきかという疑問がおこってくる。この疑問に對してつぎのようにいう（一貫道疑問解答）。

三教はみな無極という「理」に基いているから、當然その間に高低の差はない。ただ世俗の状態を考え、歴代の祖師がみな佛徒だったため、比較的佛教を高くみるにすぎない。應劫經には、混沌が始めて開けた時に、十佛が掌教することに定つていたが、已に過去七佛の掌教時はすぎ、あとは燃燈、釋迦、彌勒の三佛を残すだけだ、とみえているが、燃燈佛は過去千五百年を掌り、釋迦は燃燈の授記によつて說法すること四十九年、多くの經典を残して、永くその教えを傳えた。その教えの中心は直指人心、見性成佛におかれるので、色聲などの六塵を排して一切の現象をさ



り、無我無相である。後世釋迦を佛祖と稱するのは、かく佛法の根本をといたためである。老君は、姓を李、名を耳、字を伯陽といい、孔子が禮を問うた後青牛にのつて西に行き、函谷關をでて胡王の尹喜を度した。その道の中心は淡泊養心におかれ、その修行方法は、まず精神の修養——道教という内丹——につとめ、その完成後に金丹を煉る——道教という外丹——という。老君は道德經、清靜經などの經典をのこして世を化す手段とした。孔子の道は政と術とを兼ねるが、これは衆知のことだから多言しない。要するに三教はすべて性理の究明を根本とし、その倫理や綱常はみな本性からの發露である。性の本體が明らかになれば、倫理や綱常は習つたり、努めなくても、自然に正しくなる。これはいわゆる「明體達用、本固枝榮」であつて、自然の理である。だから三教の中の一つを偏重する必要はないのである。ところが甚だ殘念なことには、現在佛教はその妙道を失ひ、道教はその金丹の口訣を失つて、ともに單に念經誦懺して食を乞ひ、人々から養つて貰う状態にあり、儒教はその心法や性理を失つたため、世の文人たちはすべて章句の註解に身をやつすにすぎず、もし知止定靜などについて質問すると、びつくりしてききかえすのが關の山で、窮理、盡性、養性などの法を知る人はめつたにない。このように三教はみな廢絶に近い有様である。一貫道が三教を齊修し、不偏不倚なのはこのためである。儒の禮儀、道の努力、佛の規戒を守り行つていれば、小にしては延年益壽しえ、大にしては道の奥義を明らかにして眞人となることができるのだから、道徒はこの點をよくよくわきまなければならぬ。と。

右の説明には、釋迦が直指人心、見性成佛をといいたとか、孔子が禮を老子に問うたとか、或は古來の一貫道の掌教者をすべて佛徒といい、或は五行思想によつて五教を解釋するなど、荒唐無稽な附會や矛盾、誤りが多いけれども、それらの點を一々指摘訂正することはやめ、ただ一貫道という諸教歸一の内容およびその説明の仕方を紹介するだけに止めておく。

さてこのような三教歸一思想は、實は相當古い歴史があり、その萌芽は既に早く六世紀の始め、梁の陶弘景の思想中にみいだされる。早く常盤博士も指摘された通り、弘景は身は道士でありながら、詩・書・禮・孝經・論語などの經書に註を施し、佛教を學んでその教理に基いて道經の體系化を試みた。たとえばその著眞誥卷十九の叙録には

仰尋。道經上清上品事。極高眞之業。佛經妙法蓮華。理會一乘之致。仙書莊子內篇義窮玄任之境。此三道。足以包括萬象體具幽明<sup>(24)</sup>

といい、眞誥とは眞人のお告という意味であるが、これは佛經で佛說というのと同じだともいつているから、彼に佛經による道經の體系化という意途のあつたことは明らかである。朱子は眞誥に對して「末後にある道授篇——ただし現存道藏本眞誥にはない——は四十二章經の意をぬすんで作つたものである。こればかりでなく、地獄、託生などの妄誕な説は、佛教の中でも至つて鄙陋な部分をぬすんで作つたものである」と評しているが、とにかく弘景が佛教から多くかりていることは争えない事實である。北魏の曇鸞大師が武帝の許可をえて弘景の許を訪れ、長生の仙術を授つたという有名な話もあり——雲笈七籤卷五十九には曇鸞大師服氣法と名づける服氣法がみえる——、弘景自身も鐘義山という沙門を尋ねたと傳えられているから、弘景は佛教に對しても一見識をそなえた、すぐれた人物であつたとななければならぬ。彼は三教を兼修したとはいえ、やはり中心は道教におかれていた。それはとにかく、少くとも南北朝の半ばごろに、道教を中心とする三教調和の動きがあつたことは事實であつて、これは歸一思想の先驅といふべきであらう。

南北朝時代には、このような調和思想があつた一面において、佛道二教の間でしきりに對論や論難が行われた。その當面の目的は互いに他を壓倒することにあつたが、結果的にいえば、佛教をして道教的佛教即ちシナ佛教たらしめ

ることに力があり、他面道教をして佛教的道教たらしめるのに役立つた。従つて南北朝時代は道佛二教にとつてきわめて重要な時期で、この時代に兩教はともに後の隋唐時代に大飛躍をする基礎を作つたといふべきである。隋をへて唐に入つても、二教の間では互いに偽經を作つて他を攻撃したり、烈しい論争がしきりに行われたりしたが、それも結局他の長所をとつて自派に附加する以外の何物でもなく、益々融和合一に役立つた。唐末以後道教側でさかんに行われた天尊信仰の波にのつて作られた元始天尊像が、完全に發達した佛像と何らえらぶところのない形をとつたことは、この時代の道教が佛教から學びかつ借りたものがどのようなものであり、また道教そのものが、どのようなものであつたかを推測させるに足る、きわめて重要にして興味深い資料である。

北宋末、破竹の勢をもつて南下して華北地方を奪つた女眞族は、國を建てて金と號した。十二世紀の半ばに、金朝治下に屬した華北地方では、相前後して眞大道・太一・全眞の三道教々團が新たに成立した。この三教團がそなえてゐる多くの特色の中でこの場合注意しなければならないのは、これら三教團がすべて三教歸一思想に立脚してゐることである。幼少のころより儒學を學んだ眞大道教の開祖劉德仁は、弟子たちに對して、殺生戒を始めとする佛教の五戒十善をいましめるとともに、忠・孝・誠などの儒教的な徳目や道德經にみえる清靜、和光同塵、虚心弱志などの遵守を勧めた。<sup>(27)</sup> 太一教の具體的な内容はわからないが、中道を尊び、葷酒や妻帯を禁じ、治病に符水や丹書の服用を行つてゐる點から考えると、やはり三教歸一思想をもつていたらしい。<sup>(28)</sup> 全眞教團も同様で、開祖王重陽は、まず科擧に應ずべく幼少より儒學に専心し、後科擧に失敗した失意の憤懣を解決して安心の境地に達しようとして佛教に歸依したけれども意に滿たず、ついに三轉して道教中の人となつた經歷の持主である。彼は人に道德經、清靜經、般若心經、孝經の讀誦を勧め、山東地方の布教の際にたてた五會には、三教玉華會・三教金蓮會の如く必らず「三教」の字を冠

した。全眞教の立教の主旨を極めて簡潔に示し、あたかも禪僧の語録の感がある「立教十五論」では、中道を尊び、色・欲・無色の三界を超えよと教えた。全眞教團はとくに禪宗的傾向が強いが、中には禪そのままのものさえある。たとえば、眞功・眞行の二面にわかれる全眞道士の修行法のうち、眞行は禪宗の利他に、眞功は自利にひとしい。眞功の中とくに多く行われたのが打坐即ち坐禪であるが、その形といい精神といい、禪の打坐と全く同一である。そうして功行兩全の人が眞の全眞道士、得道者とされたのは、禪で自利と利他を兼具した者を佛・菩薩というのと同じである——一貫道も同じなのは興味深い——。また全眞教團において始めて清規が成文化された。私はこれも佛教にならつたものと考えているが、とくに初期のそれは百丈清規の拔萃ともいえるほどのものである。<sup>(29)</sup>馬丹陽をはじめとする重陽の諸弟子の詩集や語録の中には、仙佛は同源だとか、三教は古來から一家風だとか、三教は鼎の如しとか、三教歸一をのべた言葉が隨處にみられる。古今の道教々團中では、全眞教團が最もはつきり三教歸一をのべているのである。<sup>(30)</sup>

ところが三教調和の傾向は、決して金元時代の道教界のみの特長ではなく、實は北宋初期からの宗教界・思想界の大勢であつた。このことは唐代の佛道二教の關係からでも推察がつくが、北宋の陳搏、張商英、李綱、南宋の朱子、金の李屏山などの儒者、智圓、契嵩などの僧侶たちは、それぞれ他の二教を研究して三教鼎立說や調和說をのべているのであるから、三教調和思想は宋代にほぼ確立されたといつてよからう。元代以後は、この傾向が益々強くなつた。このような成立宗教々團の傾向に對して、民衆の間に生きていた宗教や信仰の傾向はどうであつたろうか。それはいうまでもなく、古くから三教はおろか萬教調和であつた。民衆の信仰は、古代からの信仰を基調としてはいるが、佛教が傳來すれば佛教をいれ、キリスト教が傳われればそれをも包攝するという、いわば流込むすべての河川をう

けられる大海にもたとえられるものであつた。それを文字にあらわしたものが太上感應篇・陰陽文・覺世真經などの、いわゆる善書である。明代に入つて成立諸宗教が民衆から浮び上るにつれて、民衆の間に生きていたこのような信仰を基調とする宗教集團が結成されるようになったが、それが無爲教などの寶卷流宗教に他ならない。無爲教などが三教歸一の立場をとることは、すでに塚本・吉岡・澤田などの諸氏がのべられた通りであるが、<sup>(31)</sup>無爲教に限らず、すべての寶卷流宗教が同様の立場にあることは、右のべたところによつて明らかであろう。然らば、三期末劫思想の面で寶卷流宗教の系統をひく一貫道などの現存宗教的秘密結社が、三教歸一思想の面でもその系統をひくことは、當然のことでもあらう。ただキリスト教のようなきわめて異質的なものまでとり容れていることに對しては、一見奇異な感じをうけるが、實は中國人が受容しているキリスト教は中國的に變貌した天主教なのである。明代にキリスト教が傳來した際、當時の中國人はこれを儒教の一派と理解していた。<sup>(32)</sup>また約十年前には、教會から「天主玉皇之神位」と記した竈神の繪像に似た木版刷りを年末に信者に配布していたというから、人々が何ら奇異な感じをいだかないのは當然である。<sup>(33)</sup>要するに三教歸一思想の面からいえば、一貫道は直接には寶卷流宗教の、間接には全真教などの成立道教々團の系統をひいていいるといえよう。なお、一貫道がこのような立場をとるのは、古くからの系統をひいていいることもさることながら、道徒が一貫道はきわめて包擁的で、いかなる宗教や宗派にも「來者不拒」の態度をとるといい、現在は白陽劫が目前に迫つていいるから大いに普度を開く時だとしていいることを思えば、布教宣傳に資するための一法でもあらうことを附言しておく。

## 二 理氣象の三天

小説や民間説話を通じて考えられる中國の民間信仰には、はつきりした來世觀が窺われない。一貫道はこの點極め

て現世的で、人間界と神のいる場處とを、地球上からの立體的な距離の差として考える。また多少地獄にも言及する。その場處は、地下のようではあるけれども、はつきりしない。現在人間が住んでいる地球上の世界を象天と名づけ、その上即ち成層圈中に仙佛のいる氣天があり、その上に天地主宰の最高神無生老母がいる理天がある、としている。道徒はこの三天についてつぎのようにいう。

理天は、無極理天、極樂理天ともいい、一貫道徒の將來歸宿すべきところである。理天は極樂に似て善美を極めているが、極樂のように抽象的な存在ではなく、空氣も引力もない成層圈上に現存している。布教師からくわしくその狀態をきいた人は、一日も早くこの混亂した塵世をすてて理天に行くことを切望するに相違ないほどよいところである。

氣天は太極氣天ともいう。修行の完成した人はみな仙佛であるから、氣天に行くことができる（この場合、死後に行くのか、存命中でも行けるのかはつきりしないが、どうも後者らしい）。ここに住む仙佛といえども、理天におけるが如き清福を享受することはできず、場合によつては輪廻の苦におちることさえある。氣天には陰陽があり、變化があるので、生死、終始がある。氣天の一終始は十二萬九千六百年で、これを元會と名づける。元會は子より始まる十二支の名がつけられている十二會にわかれるが、始めの六會は物を開き、その後の六會は物を閉ぢる時である。即ち子から午までは無から有に至り、午から子までは有から無に至る時である。天は子に始まつて戌に終り、地は丑に開けて酉に没し、人は寅に生れて申に歿する。そうして最後の亥會に天地は混沌となつて、つぎの子會にまた天が生ずる。このように、この世界は丁度四季や一日の時間の運行と全く同様に、循環してやまない。現在は午會が終り、未會が始まる時にあたり、天地が創造されてから既に約六萬餘年を経過している。この間、既に青陽・紅陽の兩劫は

すぎた。第三の白陽劫は午未交替の際即ち現代におこることになっている。氣天も象天とともに、將來の劫の時には破壊されるから、道徒は一日も早く理天に行くように心がけるべきである。

象天は、佛極象天、皇極象天ともいう。氣天に變化、終始がある以上、當然象天にもある。ここは塵世である。白陽劫が目前に迫っている現在、人々は一日も早く入道し、修行を完成して氣天に行けるようにするか、道の奥義をえて理天に行くように心がけるべきである。

性理新介紹ではこの三天の生成とその關係とをつぎのように説明している。

老子がいうように、原始の本體即ち道は無形無名なので、無極と名づけるが、性質からいえば理、區別からいえば天である。無極は天地未分化の時からあつた萬有の根源である。無極の一動で五行が化生し、剛は陽に、柔は陰となつた。軽い陽は浮んで天に、重い陰は凝固して地となり、天地の氤氲により萬物が生じた。その中で有象有形を象天、有氣無形を氣天、渾然たる眞理で無聲無臭を理天という。理天は眞空から氣天を生じ、氣天は象天を化生したから、この二天はもと沉濁に屬するが理天から離れていない。しかしこの二天を交えないから、理天はこの二天がなくとも存在するが、二天は理天なしには存在できない。従つて二天には變化があり、理天には變化がない。この三天が合して無極の全體を形成する、と。

結局將來の劫に破壊されない永久不變の理想郷である理天に行くように、換言すれば、早く一貫道の奥義を悟ることを勧めているのであるが、このような三天の考え方は他の宗教的秘密結社でははつきりしていない。

#### ホ 崇 拜 對 象

一貫道は以上のべたような性格をもつので、崇拜對象は極めて雜にして多である。そこで主なものだけを選んで紹

介しておく。

○無生老母 一貫道の最高神。天地創造の母、萬物主宰の神であるが、實は無極を神格化したもの。全名は明々上帝無量清虛至尊至聖三界十方萬靈眞宰だが、多く無極老母、育化聖母、維皇上帝、明々上帝または老母と略稱される。別に先天の字法である、母字を横にした中でも表わす。中の「口」は無極を表わす○を、中の二點は太極☯の中の一陽一陰を表わし、「一」は「一畫開天」の意をもつ。無極には天地萬物や人類を育生する能力があり、無形から有形を、有形から無名を生ずるから無極老母といい、天地萬物の主宰という。道徒の最終目的は「歸根認母」即ち老母の許に歸えることだから、最も深い信仰をうけている。布袋の姿で表わされる。

○濟公活佛 無生老母が一貫道の教務を掌るために派遣した祖師、即ち張天然の眞身である。道中における威信と信仰は老母とほとんど變らず、むしろ老母の域をます場合さえある。各佛堂——一貫道の寺院——では毎日乩示を請う規定であるが、濟公は日に十八回も下ることがある。いわゆる仙佛は億萬の化身ありで、多くの佛堂で同時に請神しても、異處に同時に垂示する。信仰が深いために別名も多く、濟公禪師、濟公爾師、南屏道濟、南屏瘋僧、濟公靈妙、靈妙大師、靈妙天尊、濟公聖僧、南層僧、酒醉顛僧、酒醉濟顛、靈隱酒狂、西湖酒醉、酒醉狂叟、靈隱禪師、湖隱道濟、西湖道濟、南屏狂叟、濟公顛倒、活佛師尊、活佛爾師、瘋僧爾師、紫衣和尚、窮僧紫衣といわれ、濟公、濟顛、師濟、濟とも略稱される。

○彌勒古佛 各劫と同時に下る大道をすべるために老母から派遣された祖師。原則的には濟公より地位が高いが、實際には濟公の陰にかくれてあまり活躍しないので信仰は濟公より低い。布袋の姿で表わされる。別名は金公祖師、白陽教主、通理子、大肚通理、大肚金公、金公笨祖、儒童祖、儒童金公、元道眞人、布袋羅漢で、彌勒佛、



彌勒と略稱される。

○呂洞賓 呂祖である。彼は全真教團の五祖の一人とされて尊崇された結果、八仙の一人にされ、關帝とともに最も人氣があり、廣く人々から親しまれている。その傳はすこぶる傳説化され、架空の人物と考えられているが、宋史陳搏傳に附傳されるから、實在人物である。唐人と一般にいわれるが、實は五代宋初の人である。一貫道では濟公、彌勒、關帝、觀音とともに基本五神の一に、また別に關帝、張飛、岳飛とともに四法律主の一とされる。道中での地位が高い上に、垂示の回数が濟公につぐため、絶大な信仰がある。別名は孚佑大帝、孚佑帝君、純陽帝君、純陽祖師、呂純陽、呂道巖、呂天才、呂總戎といい、略稱は呂祖。<sup>(34)</sup>

○關帝 關羽である。道中での地位は高く、呂祖とともに基本五神および四法律主の一人とされるが、實際の信仰の點では前四者に及ばない。別名は協天伏魔大帝、神威鎮遠將軍、神威鎮遠天尊、關雲長、關夫子、關公という。

○觀音菩薩 基本五神の一。道中では關帝と全く同じ地位におかれている。別名は南海觀世音、觀世音菩薩、南海大士、南海聖宗、慈悲大士、慈航大士、慈航天尊、九蓮教祖、觀世音、觀音。

○月慧菩薩 張天然の夫人の前世における眞身である。だから月慧師母、單に師母ともいう。

○教化菩薩 實體不明。垂示もあまり行わないが、毎日焼香の際にその名をよんで叩頭の禮を捧げる。

○鎮殿元帥 張茂猛という人だが、事跡は詳かでない。教化菩薩と同様、焼香の時に叩頭する。

○鎮殿將軍 老母が下した魔を考査する考試院の院長張茂田である。焼香および他の神靈の上昇、下降の際に行う儀禮の時にこの名をよんで叩頭する。茂田八爺、三天考試院長、三天主考ともいう。

○張桓侯 張飛である。四法律主の一人。焼香の時にその名をよんで叩頭する。別名は巡天都御史、桓侯大帝、張

三爺、老張。

○岳武穆 岳飛である。四法律主の一人。道中の扱いおよび地位は張桓侯と同じである。別名は巡天元帥。

○竈君 中國の各家庭と親しい關係にある竈の神で、俗稱を竈王爺という。焼香の時に叩頭の禮を捧げる一人である。

○南極仙翁 一般的には人間の壽命を司る星を人格化したものだが、道中では氣天の仙佛や亡靈を度す時の調査役とされ、地位は比較的高い。別名は南極老朽、南極壽星、長生大帝、南極三天老邁、南極南三天壽星という。

右の他には太上老君、道德天尊、達摩、孔子、老子、釋迦、キリスト、マホメット、孟子、曾子、文昌帝君、李鐵拐、何仙姑、柳宏教、梅仁聖、王羲之、諸葛亮、地藏、萬仙、文殊、普賢、阿修羅、接引佛、悟禪師兄、印鏡和尚、飛龍和尚、比丘法海、九蓮開花妙道天尊、王重陽、金闕帝君、靈山佛母元君、邱長春、張三豐、鍾離權、三官大帝、韓仙、姜子牙、子路、子思、顏淵、李士材、羅洪先、旌陽真人、玉蟾真人、響月文通佛、清風佛、無量渡世佛、金光佛、四大元帥、哼哈二將、四海龍王、四大大王、二十八宿、八大金剛、李廷玉、張仙、雲姑大仙、王承恩、城隍、土地、關興、周倉、關平、福祿財神などがある。道徒はこれら崇拜對象のあるものには毎日、あるものには垂諭の時、またあるものには儀式の時に、それぞれ定められた規則に従つて焼香叩頭し、その加護を願い、救いを求め、一日も早く理天に上るよう祈るのである。これらの仙佛は、實體不明のものを除けば、大體三教と民間信仰の崇拜對象とに大別されるから、ここにも三教歸一思想の片鱗が窺われる。また道教關係では、鍾離權、呂洞賓、王重陽、馬丹陽、邱長春、張三豐など全眞教關係のものが多く、これにより、一つには全眞教團が金代以後民衆の間に極めて深く根を下したことが窺われ、一つにはそれがもつ三教合一や庶民的などの性格の展開の仕方がほぼ明らかとなるので、

興味が深い。と同時に、一貫道に受容された道教的要素は、多く全真教的なものであろうことを示唆するであろう。最後に、崇拝對象中に李廷玉の名がみえることについて注意しておきたい。廷玉は、明末清初の間におこつた宗教的秘密結社の一派といわれる先天道の開祖である。先天道側では一貫道をその一分派だというのに對して、一貫道側では一言もふれていない。しかし彼をその崇拝對象の中に加えていることは、先天道側の主張の正しさを物語る一證であるとともに、一貫道が先天道の系統をもとり入れていることを示めす一例であらう。従つて恐らく他の宗教的・秘密結社の要素をもいれているであらうと考えられる。ただし廷玉の道中における地位は左程重要でなく、深い信仰はえていないようである。

## へ 解 經 法

一貫道が萬教歸一と號し、その一を偏重することはないが、歴代の祖師や世俗との關係から佛教を高しとするといつてゐることは前述した。しかし、一貫道は孔孟の傳えた大道であるといつて孔孟を高い地位におき——後述のように孔孟大道と別稱する——、大學や中庸を唯一の寶典とよび、教義の説明には儒學とくに朱子學を用い、五教を五行思想で解釋する時には儒を中央におくなど、實際には儒教を強く表面に出している。その理由は自派の正統性の辯護に求められるであらう。ここに紹介する解經法とは、多くは經書の解釋および説明である。道徒はこれについて、つぎのようについて。大道が最初にこの世に下つた時には、佛基兩教の開創時と同様、經典がなかつた。この二教の經典は、開創者の歿後に弟子たちの手によつて作られた。それと同じく、青陽期が終り、燃燈佛が傳敎した後に、三經二書がこの世に遺されたけれども、それらは後に散佚してしまつた。同様にして紅陽期の後には五經四書が遺された。これが儒家が尊ぶ現存の四書五經である。白陽期を經過した將來には、七經六書が出現する筈であるが、それを遺す

のは張天然である。内容は五經四書を藍本とし、溫故知新の意を含む筈である。ところで經書に對する從來の俗儒の解釋は不備で、その奥旨を闡明したものは少い。その點を明らかにすることもまた天然に課された使命である、と。

こうはいうものの、實は、經書に一貫道に都合のよい自己流の附會的解釋を加えて、經書が一貫道の玄義を傳えている旨を道徒に納得させようとする一種の布教手段ともいふべきものが、解經法である。従つて前述の「吾道一以貫之」に下した解釋のような、實にユーマラスな説明を加えているものが多いので、二三その例を紹介する。

○子曰。學而時習之。不亦說乎。有朋友自遠方來。不亦樂乎。人不知而不愠。不亦君子乎。

解釋 「子」字は「一」と「了」とがついたものである。これは思慮や私欲がない様子だから、天理の純全に相當し、見聞することができない。だから無臭無聲の理天を表わす。「曰」字は「口」が「一」をえたものである。

口が一をうればよくいうことができるから、有聲有色、即ち氣を表わす。「學」字は一貫道の眞傳を學びうるとの意である。従つて第一句は、眞心をもつて明師の教を求め、文字を用いず、直接に口授をえて大變喜んでいるとの意味をもつ。「有朋」以下の第二句は、遠方の人が聖賢の道脈や、一貫道の心法の優れているのをきき、四方から風をのぞんで集まつてきて入道し、聖賢の道脈の保持者になるという意味である。第三句は、一貫道の大道や微理を理解できない人即ち小人が、道徒が遠方の人々と往來するのをみて疑いをいだき、一貫道をあしざまにののしるのを聞いても、われわれは少しもおこらない。これは誠の君子ではないか、という意味の言葉である。

○大學之道。在明明德。

解釋 「大」字は人が一をえた形で、一貫道を求めえた人を表わす。「學」字の上半分は、その外側の部分を合せると「白」字になり、その中に易の爻を包んでいる。だから陰陽龍虎玄武朱雀即ち變化を白陽宮中に包む形であ

る。明師から道の奥義を伝えられるとは、三寶——後述——をうることであるが、下方の「一」は、「寶」字の頭を表わすから、結局その中に三寶を隠している意味をもつ。「之」字の上部の一點「丶」は玄關——後述——その下方の横棒「一」は廻光が中宮に返照する形、その下の斜棒「ノ」は眞陰の下降、最下の横棒「一」は陽精の再度の上昇を表わす。だから「之」字は、實に明師の印可をうけて理天に直通する意味をもつのである。「道」は一貫道、「明明」は明々上帝即ち老母である。従つてこの一句は、一貫道を學んでその玄義をえようとするのは一に無生老母の徳にある、という意味である。ところが前述の如く、王覺一の「三易探原」の大學聖經解には、「大學者。大人之學也。何爲大人。養其大體爲大人。何爲大體。本然之性。至虛至靈。即孟子所謂帥氣之志也。志即神也。人之至靈莫如神。而至明者。亦莫如神也。故曰明德。云云」とあつて、右のような子供だま的な解釋とは全く異なつた解釋を下している。これは覺一が一貫道に關係がなかつた一例であらう。

○欲治其國者。先齊其家。欲齊其家者。先修其身。

解釋 治國平天下の目的を達成したい人は、まず必ず自分が一貫道に入らなければならない。これが「修身」である。その後一家の全員が道徒になる。これが「齊家」である。各家がみな「齊家」すれば、國は自然に治まる。

○人心惟危。道心惟微。惟精惟一。允執厥中。

解釋 「人心」は汚れに染んだ妄心で後天的な性質だから、非常に危い。「道心」は先天的本然の性質で、その微妙さは全く測りがたい。「精」は明、「一」は一貫道である。一と明とだけが人心の危殆を制することができる。

「允」は篤信と柔順、「執」は遵守と歸依、「中」は眞空と妙有を表わす。眞空は至大至小であり、妙有は無始無終であるから、縦は三界に、横は十方に充滿する。そこで最後の一句は隨順歸依という意味となり、結局この

章句は三教がみな先聖のといた一貫道の眞傳を遵守し、それに歸依するという意味をのべているのである。

實はこの一句が、道統の項にしばしばでてきた「十六字の心法」である。道中ではこの一句を非常に緊要な道理として、極度に重視している。もともとこの句は舜が禹に君たるべき方法として教戒したものである。ところがこの儒者は講道の際にしばしばこれをひき、ついには堯より舜・禹をへて周公・孔子に傳えられた秘傳の口訣と考えるようになった。朱子はこれを聖人心傳の要訣としたので、朱子學ではとくにこの句を尊ぶ。のちにはついに心傳の唯一の道理として、あらゆる方面に應用されるようになった。朱子學を尊ぶ一貫道としては、これを利用するのが當然である。彼らはこれをかり來つて重要な道理の一に利用し、しかも自己のとくところにあうような自己流の附會的解釋を下したのである。これも一貫道に朱子學の入っている一例となる。

要するに解經法とは右のような經書の附會的解釋にすぎないが、いわばでたらめなこのような解釋が、何らの疑問もさしはさまれずに人々に受容されるところに問題がある。この點は大いに注意する必要があるであらう。

### ト 扶 乩

一貫道が最大勢力を獲得した大きな理由は末劫思想と、一般人には了解できない扶乩を行うためである。扶乩は飛鸞ともいう。乩の運びは鸞の下降するように早く、しかも神意は乩の下だすところに完全に現れるので、飛鸞宣化ともいう。

元來扶乩は唐宋時代から行われたしたが、當時は乩の躍動回数によつて吉凶を占う婦女の遊びの一種であつた。ところが後には、字や繪、ついには文章や詩詞さえも寫すようになって大いに流行し、清代には一部の舉人たちまでがこれを喜ぶようになった。はじめ彼らは乩で詩、對句、謎を作つて樂んだが、ついには文體を論じ、國事を談じ、は

ては科擧の課題の乚示をも請うようになった。と同時に一方では、宗教に利用されるようになったが、とくに宗教結社乃至宗教的秘密結社において甚しかった。一貫道が仙佛と交通する唯一の方法として扶乚をとり入れているのはそのためである。

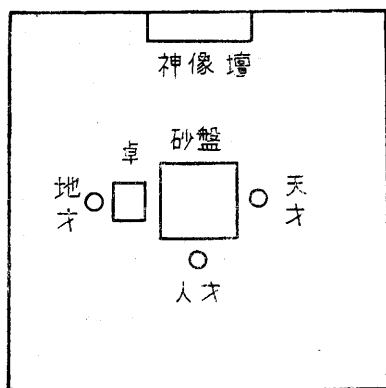
李氏の實見したところはつぎの通りである。一貫道の乚は形式上では講に屬し、道中ではこれを先天乚といい、他の結社のものを後天乚といつて區別しているが、事實差異がある。砂を入れる木製の盤は、長さ二呎半、横二呎、高さ三吋の長方形で、底は木または鐵製である。これをテーブルか臺の上におく。乚器は直徑十吋、高さ三吋半の圓形のカタミ形で、それに棒が貫通し、先は三吋ばかり上にでている。別に長さ一呎九吋、幅二吋の板の中央に長い棒をつけた砂盤をならす道具がある。道具はみな白木で、色はぬつてない。扶乚を行う時は砂盤の左側に垂諭をかく筆紙墨硯をのせる一小卓を用意する。

扶乚は三才とよばれる三人で行う。乚をもつて砂上に字をかく人を天才、天才のかく字をよみ、砂盤をならす人を人才、記録係を地才という。普通一貫道の三才は一應の訓練をうけた子供であるが、彼らは上手な字がかけないで、重要な儀式の時には彼らより知識もあり「仙佛と容易に合靈」できる年輩者が行う。だからその場合の文章は平素のものより比較的好い。印刷出版されている壇訓類の大半は、みな彼らの手になつたものである。

三才の訓練はなかなか厳しく、最低四十九日はかかる。その間毎日何回となく打坐を行う。一回の打坐は二時間から四時間におよぶ。打坐をしない時は名文の壇訓の暗誦をする。十數篇乃至數十篇暗誦して始めて合格である。なお道理の聽講や扶乚の實習もしなければならぬから、なかなか大變である。

垂示を請う——請壇——直前に、請示者が老母に献香叩頭し、三才に叩頭する簡單な儀式がある。請示者は信心深

い道徒でなければならぬ定めであるが、Grooteaers 氏に對して歓迎の垂示があつたというから、最近は大分社交的になつたらしい。三才は請壇の前にしばらく打坐を行う。請壇の場處は佛堂中の仙佛を祠つてある室である。三才



三才位置圖

に對する叩頭が終ると、三才はそれぞれ道具をもち、圖のような位置につく。記録用紙は長さ二呎に切つた白い軟質紙を使う。請示の時天才は閉目している。神靈が下ると乩はすぐ動きだし、まず砂盤上を何回となぐ廻つて多くの圓をかく。地才がこれをならし終ると、すぐに垂示が始まる。字は外側に向つてかけられる。訓文には一定の格があるらしく、大體にている。即ち最初が定壇の詩または詞、第二が臨壇した神靈の名と序文、第三が本文である。定壇詩は五言、四言、まれには詞の場合もあるが、多くは七言絶句または律である。詩の毎句の第一字目には神靈の名がよみこまれる。たとえば、

道攝二儀紫微太和平

天道轉盤東土老幼沾

德配天地氣壓上衡天

尊重莊嚴來化君登岸

のように、第一行を横にみれば「道德天尊」、第五行が「紫氣東來」、第七行が「太上老君」となる。つぎに

吾乃道德天尊太上老君李伯陽。奉母命駕降東園。參叩天母。運轉沙盤。哈哈。

と名のる。なおここに道德天尊、太上老君、李伯陽の三者が一人とされていることは注目をひく。道教ではこの三者は各別人としている。民間の信仰ではかかる混亂が多いが、これもその一例である。最後の哈哈は一段の終りを表わ



すぎまり文句で、花々ともかく。つぎが本文である。大體垂示の文體は

天地間 男女共 陰陽位定

正平外 正平内 各位規程 云云

のように、十言の韻文で、それを三・三・四字とする。天才はこれらの字を三回にわけてかくので、地才は三回にわけて朗誦した後に砂盤をならす。最後の哈々のつぎに「退」となる。退は神靈が天に戻つたことを現す。そこで乩は一圓をかく。この後は乩は絶対に動かない。ただ字がはつきりしない時に「求慈悲」といえば、また一字だけかく。

發音の誤りにはすぐに楨をたたく。朗誦後に誤りを發見した場合には圓で誤りを示めす。以上が李氏の實見した扶乩であるが、Groothaers 氏が實見されたのは、これとやや異なるというから、同じく一貫道の扶乩でも、いろいろな型があるのであらう。

扶乩はきわめて廣く應用され、萬事扶乩で決するといつても過言ではないほどである。たとえば字畫、治病、作符などの特殊な用法もある。字畫とは、神靈自身で全文を墨書することである。この場合には乩棒の先端に少量の棉をつけ、下に畫宣紙をしいてかくのである。毛筆を使用することもある。治病の場合には、病人を乩壇の下にすわらせ、その顔の前で乩をふる。これを「點一點」という。作符の場合は、硃砂で黃紙に符をかき、香爐の中の少量の香灰とともに病人に與え、別に服用法を乩示するが、多くは符をやき香灰とともに病人にのませる。處方を教える場合もある。李氏は、ある道徒が濟公活佛に阿片の吸飲をやめる處方の乩示をこうたところ、「離了香蕉是平安斷癮了」との乩訓がでたが、意味も方法もわからないので「慈悲」をこうと、濟公が若干の梨、バナナ、柿、林檎を一諸にドロドロに煮つめ、阿片を吸つた時に與えればよいと垂示したのを目撃した、とのべている。しかしこのような特殊な方

法はあまり行われない。それは、現在普度の時に當つて仙佛は多忙を極め、病人に書を賜つて治愈させているひまがないからだそうである。

### チ 術 語

秘密結社には特有の術語、隠語があるのが普通であり、一貫道にもその例に洩れず特有の術語がある。成立以來まだ日が浅い關係からか、あまり特殊なものはみあたらないけれども、地方によつて別の言葉で同一内容を表わしたり、同じ言葉に別の意味をもたせる場合があるので、くわしいことはつきりしない。そこでここでは一應普遍的な術語を紹介するだけに止めておく。

師尊 張天然をさす。濟公は活佛師尊という。

師母 張天然夫人。

點傳師 上天の命をうけて布教傳道に従事する人。張天然の代理でもあるので、代表師ともいう。

引保師 人をひいて得道させる人を引師、入道志願者の身元を保證し、入道後の指導に任ずる人を保師という。

事實上同一人が兼ねる場合が多いので、かく併稱する。

道親 道徒の稱。早く入道した者を老道親、新しい者を新道親という。道徒相互間で使う。

前人 前賢ともいい、先に入道した者に對する敬稱。年齢とは無關係である。

弟子 師尊に對する自稱。なお男道親の老母に對する自稱は餘蘊、女は信士である。

後學 點傳師、引保師、前人ら相互間の卑稱。

壇主 佛堂の主人。各佛堂には必ず仙佛から下賜された匾名があることによる。

三才 扶乩を行う者。天・地・人の三才があることは前述した。

神童 佛堂の行事、壇主、道親の行いを監視するように特殊訓練をうけて、總佛堂から各佛堂に派遣される十二三歳の子供。佛堂内に起居し、食事など一切の費用は壇主が負擔する。扶乩をよくする。

大衆 請壇および入道式に集まつた全道親。

孔孟大道 一貫道の別稱。眞天道、老母先天大道ともいう。

求道 一貫道に入ること。

齊家 家族の全員が一貫道に入ること。

領天命 老母の命をうけて點傳師となり、各地で傳道する人。

責任 天命を受けること。

先天 天地開闢以前をさす。用途が廣い。

後天 先天に對する言葉。

書訓 印刷された乩訓や道理説明書。

性理 道理の中、とくに天地生成、五行、八卦、陰陽 圖讖などの玄妙な部分の解釋。

道學 一貫道理の理解程度。

內聖外王 內功外功の別稱。道徒の修行をいう。

勸化 教外の人に道理を講じ、あるいは入道を勧めること。多く使われる。

開釋 道理がよくわからない者に、道理とくに三寶の解釋をすること。

成全 道親の信心を堅固にし、堅固な人には「責任」を負わすことに成功する意。とくに仙佛が道親に對して使う。

財施 寄附金。努力奉仕だけで金銭的寄附をしないのを「法施」、際限なく兩施を兼ね行うことを「無畏施」という。

献心 とくに老母および師尊に對する願掛け。身財齊捨、捨身不捨財、捨財不捨身の三種がある。

清口 茹素、煙、酒をつつしむこと。戒律を守ることである。ただし、卵と牛乳だけは許容する。煙とは煙草である。

花齋 煙・酒はつつしむが茹素が不完全なこと。一定の日だけ茹素する。

宏展 一貫道の發展。

慈悲 仙佛または師尊がとくに許るしたり福を加えたりすることをいう。動詞として使う。

活潑 既定の規定に拘泥しないこと。きわめて多く使われる。

道苗 道心堅固な老道親になる見込のある新道親または道外者。

護持 護法、護道に同じ。

法船 佛堂のこと。「法航」ともいう。

開荒 他の地方へ行つて一貫道を宣布し、佛堂を建立すること。

講師 壇主や點傳師以外で、道學がきわめて深く、廣く他人のために道理を講演できる人。

司禮 請壇などの儀式の席上で、式の順序を指示し、大衆に禮を行わせる司會者。「執禮」ともいう。上下の別

がある。

司茶 佛堂内で低級な仕事をやることによつて法施をたてようと願う人。その仕事は、佛堂にきた道親に茶をつぎ、雑用をたし、或は佛堂の掃除などをするのである。「勤務」ともいう。

超拔 得道または齊家した道親が、物故した先輩や親類友人を得道させようとする事。幽鬼冥魂を救済得度する特別な言葉で、その對象によつて孝拔、悌拔、節拔、慈拔、義拔などの別がある。氣天の仙佛が人の身體をかりて求道する場合にも使う。

結縁 超拔された亡靈や神靈が乩壇に降つてきて道親と話をする事。

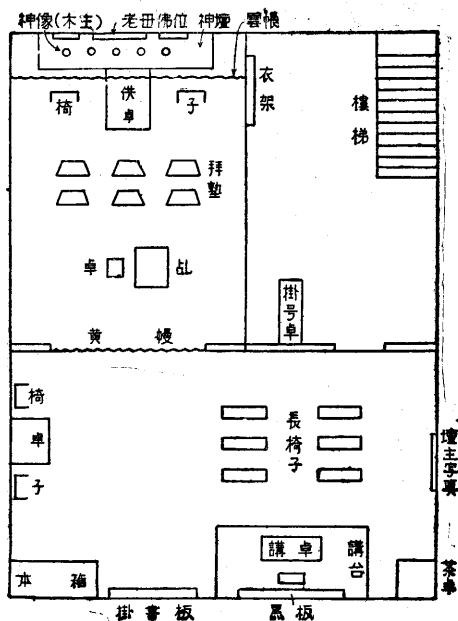
道徒相互の會話には必らず右の術語を使うことになつてゐるので、關係者か否かがすぐにわかる。だから術語は機密漏洩防止の一手段でもあらう。

### リ 儀 禮 と 儀 式

一貫道の儀式はすべて佛堂で行われるから、まず佛堂について説明する。

佛堂とは一貫道の壇場である。多くは道徒の自宅が利用されるが、適當な家になかつた場合には新たに建てる。いずれの場合でも、その場處を一般に知らさず、すべて秘密裡に事を運ぶ。佛堂は信心深い道徒が自發的につくり、本部は全く關係しない。従つて建立、修繕、管理その他一切の諸経費は、すべて壇主またはその地方在住道徒の負擔によつて賄われる。各地の佛堂相互間の連絡はあまり緊密でないが、地方毎に佛堂より一段高い地位にある總佛堂があつて、その地方の各佛堂を統轄している。壇主や點傳師は定期的に總佛堂に集まつて、道務について相談するので、その際多少の連絡がとられるにすぎない。總佛堂には組織的機構はない。各地方の總佛堂を統轄するのが、華北およ

び華中の總佛堂で、前者は北京西城の興北寺街に、後者は南京建業路にある。張天然らの幹部連中が常に住んでいるのが、この總佛堂である。



佛堂内部圖 現在華北秘密宗教による

佛堂の内部は上圖の通りである。仙佛の木主をおく室の正面には老母の繪像が掲げられ。その前に彌勒・觀音・濟公・關帝・呂祖の基本五神の神像がおかれてゐる——木主の場合もある——。儀式や扶乩はこの室で行う。その右は休息室、手前が道理を講ずる室である。

多くの儀禮の中、ここでは焼香と叩頭だけを説明する。道徒は自宅に老母や各祖師などの木主を安置して、朝晝晩の三回焼香し、定められた願懺文をよまなければならない。その時刻は原則的には、午前六時、正午、午後六時の三回であるが、極めて多忙な時、または焼香しにくい場所にいわせれた時には、焼香を叩頭にかえてもよい。焼香の時には、あらかじめ手や顔を洗い、心も淨らかにしておかなければならない。香は普通の線香でよいが、立てる数が多いので、細めのものがよい。壇で使うのは別の壇香である。まず兩手で香をもつて跪き、ついで眉と同じ高さまであげ、左手で火をつける。左手を使うのは、左手は刀も持たず、人も殺さず、善に屬するためである——道教でも左を清淨とするから道教的といえよう。佛教は右を清淨とする——。香を立てる順序、

配列および數は、家庭と佛堂、祭日と通常の日、各神靈によつてちがうが、どんな場合でも、まず最初真中に一本たてる。これは一貫道が「中一」を傳える唯一の、正統にして不偏不倚の中庸大道である意味を表わすのである。ついで前後左右にたてるが、本數は奇數で、五本を最高とする。その順序は、三本の場合は中、左、右、五本の場合は中、左、前、右、後である。家庭では、老母には五本、諸天の神靈には三本、竈神は一本、佛堂では、老母が五本、諸天の神靈、彌勒、南海大士、活佛師尊、月慧菩薩、法律主が三本、竈君が一本である。なお大祭、新年、毎月一日および十五日には別の燒香法があるが、略す。

叩頭は禮拜の一方方法である。叩頭の前には、まず揖禮をしなければならない。一貫道の揖禮は、最初に手を膝以下にさげ、ついでその手を胸の前まで戻してから叩頭のために跪くのであるが、跪いた時の兩手は握合せるか、「抱合同」——後述——の形にしなければならない。一般に叩頭といえは頭を地につけることになっており、一貫道でも同様に定められてはいるものの、普通は略して頭の代りに手をつければよいとされている。叩頭すべき對象や回數は、禮節によつて異なる。たとえば、點傳師から訣を授けられた時には、謝恩禮といつて、授與後、老母に三回、諸天の神靈、彌勒、南海、活佛師尊、月慧菩薩、師尊、師母、點傳師、引保師、大衆に各一回、計十三回叩頭しなければならない。この他佛堂に入る時に行う參駕禮および出る時の辭駕禮には二十一回、仙佛が降壇した時の接駕禮および上天の時の送駕禮では二十八回もしくは三十一回、燒香叩頭禮の時には三十八回行うことになっているが、くわしいことは省略する。この他に獻供というお供物の種類、獻げ方、品名、數および地方別などの規定があるが、煩しいので省略に従う。

儀式の種類も多いが、中でも最も主要なのは求道者に三寶を傳授する入道式即ち點道禮であるから、儀式的代表的

な例として、その概略を紹介する。點道禮は原則的には半月に一度定期的に行うことに定められているが、求道者の多い場合には一週間または半週に一度行う。それでも間に合わず往々隔日毎に行う場合さえあるという。式は結縁香、献供、請壇、明々上帝九五大禮、點道、降壇批訓、講道の七段に分れるが、求道者は式の前にあらかじめ、姓名、年齢、本籍、職業、住所などを登録し——これを掛號という——、同時に後述する功德費を納めておく。これらの手續は老道親の指導を要する上に、佛堂の所在地も不明であり、式には老道親でなければならぬ二人の引保師を必要とする關係上、求道者は結局老道親の親友か親戚でなければならないことになる。これらの手續が終つた後は、佛堂内の休憩室でやすむか、比較的道行の高い老道親の道理に關する話をききながら、式の開始をまつことになつてゐる。

式の最初に、點傳師または壇主が司禮を始め式に必要な役員を指名する。式は結縁香に始まる。これは、點傳師または壇主が老母の前に供えられた香爐に若干の壇香をたくだけの簡單な儀式である。第二の献供以下はすべて司禮の指圖によつて行われる。献供は求道者の焼香で、二人づつ並んで行うが、焼香の前後には六回づつ叩頭する。第三の請壇は、老母以下諸仙佛の臨壇を請う儀式である。その始めに、司禮はその場にいる人々を調べ、もし求道者または道親以外の人々、たとえば單なる參觀者などがいた場合には、直ちに場外に退出させた後、求道者の點呼をして所定の位置につかせる。ついで神に臨壇を請う請壇經を讀誦する。讀誦が終れば神々は臨壇したものと考へてゐるらしく、特別な作法はない。つぎが入道志願の許可を神に請う九五の大禮である。司禮の指揮に従つて、一同はまづ香を十五回献じ、同じ回数だけ叩頭する。ついで請壇人が願文をよみ、つぎに神の許可を請う願文を、最後に表文をよみ上げるが、一つの願文の讀誦が終る毎に數回の叩頭を行う。表文の奏上が終ると、表文は直ちにやかれる。その後で十回の叩頭を行う。つぎが求道者に三寶を傳授する最も大切な點道である。この儀式は點傳師の献香、叩頭に始ま



る。點傳師が所定の位置に戻ると、求道者の名簿を手にした引保師が求道者をつれて、献香、叩頭し、つぎのような誓文を奏する。

明明上帝蓮下。今天願引願保(保師)大衆。如若引入保入左道旁門。邪教白蓮。誑哄大衆之錢。以及所保所保求道人。身家不清白。品行不端正者。天打五雷轟身。

ここで注意しなければならないのは、道親は他の宗教的秘密結社に關係してはならないこと、白蓮教を邪教とよぶことの二つである。ある結社の者が他の結社に關係してよいか、關係している者がありはしないかということは、よく問題とされるが、少くとも一貫道はそれを認めないことが右の誓文によつて明らかである。また内容的には白蓮教の流れを汲むのにも拘らず、それを邪教とよぶことは、一貫道は、一般社會から邪教視されている白蓮教とは全然性質を異にするという旨を道徒に傳えて、疑念を解消させると同時に、逆に正しい立派な教えだという安心感と信頼感を道徒の腦裏にうえつけるための一手段であらう。従つて右の誓文は、一つには道徒に一貫道の正道たる信念と自信を持たせて、布教に便ならしめる意味をもつていふと考えられる。あるいは官憲の彈壓を免れる意味もふくまれているのかも知れない。さて誓文の奏上がすみ、その後の叩頭がすむと、求道者を一人づつよびだして所定の位置につかせ、點傳師が一貫道の正大なこと、入道後道務に努力すべきことなどについて訓話する。それから最も大切な三寶の傳授が行われるが、その途中で求道者は、入道後は誠心をもつて行動し、嘘をつき、規定を守らず、秘密を洩らすなどの教えに外れたことは絶対にしない旨の誓をたて、何回となく叩頭を行う。三寶を授與されると、老母以下の諸仙佛から陪席の全大衆にまで、入道を許されたお禮を意味する叩頭即ち前述の謝恩禮を行つて點道が終了するのである。第六の降壇批訓は、乩訓によつて仙佛から三寶の意義を解釋して貰う儀式であり、最後の講道は點傳師の道理に

關する講話である。以上が點道禮の大體であるが、式の終了後、新道親たちは若干の經典をわけて貰う。點道禮は男女一諸に行うが、その順序は男子を先とする。

#### 四 修行と戒律

##### イ 三 寶

道親になるためには、老道親二人を引保師に頼み、その指導の下で點道禮に臨んで點傳師から三寶の傳授をうけなければならぬことは、前述の通りであるが、道中では三寶を極度に重視し、その漏洩を絶対に禁止している。道徒は三寶の意義をつぎのように考えている。

三寶は極秘にして至貴のものだから、天地開闢以來幸いにしてこれをえためぐまれた者は極めてまれである。三教を始めとする各種の宗教に入り、數十年におよぶ參悟、修煉をつんで最高の境界に達した人でも、甚しきは仙佛になつたものでさえも、三寶をえなければ理天には登りえない。人々は三寶をえて始めて永遠に輪廻の苦から脱することができる。三寶を暗轉すれば、凶を吉に、禍を福に轉じうるのであるから、白陽劫が目前に迫っている現在、三寶をえた者だけは一切の劫罰から免れることができる。罡風が一たび來れば、一切は破壊されて混沌たる状態となるが、その後にはまた一新天地が開ける。その時には、太陽は南からでて北に入り、一日は三十六時間となり、天候は極めて順調にして草木はしげり、穀物は豊かにみのり、一切の苦惱のない眞の極樂世界が展開される。三寶をえられなかつた人々は、この極樂を享受することができず、罡風によつて消滅して終わなければならない。だから一日も早く仙

機をえて三寶をうべきである。幸いにして道親になつた人は、何代か前の祖先以來の積徳の結果か、氣天の仙佛の轉生であるから、その恩を忘れないように心掛けるべきである、と。

右のように、道徒は三寶をうることは大道の奥義をうるのと同じだとし、文字通り「朝聞道夕死可矣」と考えている。だから多くの人々が一貫道に入る目的は、三寶をうるためだとさえいうことができよう。三寶はこのように大切なものであるから、彼らはこれを一生忘れないように注意するともに、たとえ父母妻子にさえも洩らさないほど、絶対に口外しない。萬一うっかり口外したり、他人に傳えたりした場合には、たちどころに五雷に打たれて身體は血濃になつてしまふと信じている。

三寶は、文字の示めす通り三つにわかれ、第一は「抱合同」と名づける一種の指訣である。指訣は元來佛教で印または印契、道教で手訣、掐訣といい、十指の組合せによつて通眞、制邪、役將、治事などの目的を達する一手段である。<sup>(36)</sup>一貫道では指訣に舊新兩世界の交替を象徵するとの意味をもたせているから、形だけは佛道二教のそれにしているが、意義は大いに異なる。吉岡氏の研究によれば、道教の指訣は七百餘種にのぼり、明末清初の風雷教手書には二百九種の名が掲げられているそうであるが、一貫道ではただ一種である。抱合同の形は、兩手の掌を自身の方にむけて左手で右手を上から握り、右手の拇指で右手の薬指の根本をおさえ、左手の拇指で右手の小指の根本をおさえて、身體から僅かに離して胸の前に保持するのである。抱合同は「子亥相交」の意味をもつ。舊新兩世界の交替の象徴とするのは、子と亥とが十二支の始終のためである。別に、子と亥をつければ「孩」字となる。老母がよび戻そうとしているのはその孩である原子たちであるから、抱合同をむすぶことによつて、自分が老母の許にかえるべき孩である旨を現す、という解釋もある。この解釋の方が道徒にとつては好ましいであろう。いずれにしても指訣本來の意味か

らは大分離れた解釋が施されている。なお點道の時には、單に手のくみ方を教えられただけである。三寶の第二は「玄關」といい、場處は兩眉の間であるが、その説明は實に愉快である。一貫修道須知にはその重要性について「玄關は人間の中樞で、靈性の宿所である。胎兒の身體の中では玄關が最初に備わる。別名を神氣穴、方寸地、生死門という。佛教の不二門、正法眼藏、道教の黃庭、易の知止所がこれであり、人體の中心である。天でいえば斗柄の中心に、地でいえば須彌山の中心にあたる」といつて、その重要性を強張している。また道徒は、普通目耳口鼻および眉を五官というが、實は眉は誤りで、造物主の本意としての第五官は玄關である。玄關は死後靈魂が昇天する大道であり、生存中には一身の主宰であつて、一切の智慧聰明さの根源が宿つている。だから、人々は難題にあうと必らず眉をしかめるのである。かく大切なものではあるが、普度の時でなければわからない、といつてゐる。玄關の傳授は、最初點傳師が求道者の右側に立ち、口中で「一指中央會」と唱えつつ、右手の中指で求道者の兩眉の間の一點をおす。ついで左側に廻り、「萬法得超然」とひそかに唱えつつ、左手の掌で求道者の顔前を少時おおうのである。これを玄關の點開という。點開された人の靈魂は、死後ここから理天に直昇する。これに對して未點開の人の靈魂は兩眼から散出し、あるいは氣天に遊び、あるいは地獄に行く。それは點開者の瞳がちらず、未點開者の瞳が羊のように散ることで、明らかである、と説明されている。玄關と名づけたのは、理天への入口という意味からであらう。

三寶の第三は眞言である。秘密結社には眞言はつきもので、白蓮教の眞言は「真空家郷、無生父母」の八字である。一貫道では五字で、音聲だけあつて文字がないから、無字眞經とも名づける。眞經とよぶのは、これだけが眞正の經で、他はすべて假經のためである。従つてこれに通じていれば、他の一切の經は必らずしも覺える必要はない。文字がないというものの、實は「無太佛彌勒」の五字である。第一の「無」は無極、「太」は太極、「佛」は佛極

をさし、「彌勒」は彌勒佛をさす。この五字の眞言は、口中でひそかに唱えることはできるが、書くことはもちろん、明らさまに口にすることは許るされないので、道外者にはこの五字を連ねてかいたものをみる機會は全くない。眞言は理天に行くパスポートとしての價值をもち、これを忘れた者、知らない者は、一步も天門を入ることができない。以上が非常に神秘化され、極秘にされている三寶の實體である。われわれからみると實に多愛なく、馬鹿々々しいものでさえあつて、これを極端に重要視する理由と、彼らの心理の理解に苦しむのである。けれども宗教や信仰には神秘が必須の要件である。また多愛ないものなるが故に、なお一層極秘にしなければならないのかも知れない。しかしわれわれとしては、このようなものが何らの疑いもさしはさまれずに、大まじめで信ぜられ、實行されているところに注意を拂う必要があるのではなからうか。中國の一般大衆の多くは、科學的文化の確立と、迷信の打破とに懸命の努力を拂っている中共の治下においてさえ、いまなおこのような状態にあるのである。中共當局者は、大衆の遅れた意識を覺醒させるために努力していると傳えられている。このような三寶が心から大衆にうけ入れられているとするならば、正に遅れた意識がいまだに根強いといわなければならないまい。

### 口 修 行

點道禮で點傳師より三寶を授けられて入道した道徒は、一面では道外者と同様に自己の職業に従事する。その職業はのちにのべるきわめて特殊のものを除けば、どんな職でもかまわないことになっている。他面彼らは、道徒としての修行をしなければならない。同じく修行とはいふものの、成立宗教のそれとは、以下のべる如く大いに趣きを異にしている。しかしとにかく修行と名づけられることをするのであるから、道徒の生活は半聖半俗といえるであらう。

一貫道徒の修行は、前述のように禪宗や全眞教とほとんど同様な二つにわけられる。一は成已であり、他は成人であ

る。成己は修身または内功ともいい、自己の過ちを懺悔して改め、一切の行爲が理にあうようにすることであり、成人は天に代つて道理を宣揚すること、即ち自分が得た道義を親子や友人などの親しい人々に知らせ、一日も早くその人々が過ちを改めて、入道するように努めることで、外功または度人ともいう。中庸にいう「率性之謂道」が内功に、「修道之謂教」が外功にあたるともいわれている。一貫道疑問解答では、内功は自己の一切の行爲を、すべて理に合せ、心を清くし欲を少くして、心を制する努力をすることである。制心の法は靜坐が最上である。一體智慧は精神から、精神は安靜から生ずる。また精氣神を煉化して虚にかえるのも安靜によつてである。安靜にするのは靜坐によらなければならない。その方法は朝晩端坐して、目を閉じて神を養い、舌は上あごをなめ、心を平らかにして氣を靜め、一切の雜念妄想を去り、善も惡も思わず、動搖せず、不出不入にして、一念もおこらないようにする。萬慮がこらなくなれば、心は湛然として清澄となり、内外に物がなくなる。この状態が安靜であり、易經にいう寂然不動の状態である。この状態を永くつづけるならば、自然に原初に復することができる、と。だから一貫道という靜坐も、禪宗の打坐と大體にたものである。また外功については、勸善成人で、普く衆生を度し、人々を善に向け、濟人利物の事を行い、災を救い世を救う心を持ち、己を正したのちに人を正すことである。善書の抄寫、佛堂の建立、道義の宣傳、啓蒙などは、中でも大功徳である。善書の一句をかくことは萬言にまさる。三教の聖人たちでさえ、これ以上のことはしていない。急難や災厄にあたつては、少額の時は一人で出資し、多額の場合には共同出資して人々を救済し、災を除くように努める。もし金錢をつかわない場合には、常に溫顔で人に接し、助言を與え、父には慈を、子には孝を、兄には友を、弟には恭を、夫婦には和を、朋友には信實を、官吏には忠正を、惡人には改邪歸正を、善人には養性修真を勧める。このように三教を廣め、四恩を傳えるのが外功の功徳である。一人を成道させれば、その九祖

は理天にのぼれる、といつてゐる。一貫道の内外二功と禪や全眞教との關係については前述したから、ここにはくりかえさない。内外二功のいづれを先とするかについては、現在末劫の災厄が目前に迫り、時は正に緊張しているから外功を重視し内功を輕んじてゐる。外功が圓滿なら内功も自然に成就する。だから修道にはまず外功を先とすべきであるといひ、しかも、また一方からいへば、身も修めず、家も齊えずして他人を満足に教え導ける人はない。自己を完成し、正してからはじめて利他ができるわけである。だから内功を先にすべきだともいつてゐる。要するに兩功兼具だが、やはりどちらかといへば、外功を先としてゐるようである。右のように兩功には一應うなづける理由がつけられてはゐるものの、實は道勢擴張の一方法にすぎない。従つて道徒は外功をたてることに急で、内功をおさめるのは二の次にしてゐるようである。なお修行の面では男女の道徒の間に差をつけず、ともに合作協力することに定めてある。

## ハ 戒 律

自己の修養をあまり重視しない一貫道は、戒律にもやかましい規定はない。たゞ茹素、煙酒を禁するだけである。戒については、先天の性は至清であつて、濁氣とは相容れないから、道徒は清を保ち濁を去るように心がけて始めて、本性を明らかにすることができる。従つて酒や煙、五葷三厭はみな禁じなければならない。また上天は好生の徳があるから、人々は上天の意を體して殺生に注意し、罪を上天にえぬようにしなければならぬ、とのべてゐるが、李氏の實見によると、完全に葷腥をさけてゐる人は極めて少く、みな平然と卵や牛乳を口にし、點傳師やきわめてさ虔な道徒以外は、大部分この戒は守つてゐない。しかし酒煙の戒を守る者は比較的多い、ということである。茹素が守られないため、その便法として、多く功德を行えばよいとさえてゐるほどだそうであるから、戒律は重要視敬

れていないといつてよからう。

男女關係については妻帯を認めている。その理由については、天地が交つて萬物が生ずる如く、男女が交つて子ができる。佛道二教は出家者に妻子の煩しさをさけさせるために、妻帯を禁じているが、現在の普度においては、人々を人倫に背かせるわけにはいかない。もし人々に妻帯を禁じたならば五十年後には宇宙は空になつてしまい、どうして道が談ぜられようか、といつている。成立教團でない半聖半俗の團體としては當然の行き方でもあるが、天然に妻があることも妻帯を許す一つの理由であらう。天然の妻は月慧菩薩の化身とされ、その夫妻の結合は道縁により、互いに協力して道務を行つているのであるから、世俗の一般の夫婦關係とは同一視できず、夫妻ではあつても、

「同床無事」だと辯解してある。その上、師母は一人ではなく、道務を補佐する師母や家庭で生活の世話をする師母もある、ともいつている。これは師母の才能の多いことをのべた言葉といわれているが、これはやや奇妙な言葉としなければならぬ。果せるかな、道徒も點傳師も、多くはこれを誤つて理解し、實際に二人以上の妻のあることを不合理と考えていない、と李氏という。納妾についての垂示を請う者もある由だが、大體許可しているようである。李氏はつぎのような一例をあげている。納妾の請壇をした時に、乩諭はつぎのようにでた。お前たち二人は、唐代には主人と婢女との關係であつたが、婢女は主人のあまりの虐待のために死んだ。生れ代つてきた今生では、前世の罪をつぐなうために、主人であつた者（今生では女）は、婢女だつた者（今生では男）の妾にならねばならぬ。またお前たちの八字をみると、男は女を妾にすべきことになつている。これは相性だから、それに従えば萬事順だが、背けば生命の危険がある。また男は將來某地へ行つて佛堂を開くことになつているが、女の助力がなければ、事は不成功に終るだらう、と。こうして女は妾になるのである。このように、垂示によつて納妾している道徒も少くないというか



ら、色戒は全く無に等しいといわなければならない。要するに一貫道は、戒律については眼中におかないといつてよかるう。なお前世の因縁を認めるのは、仙佛の轉生を認めるのであるから當然のことであるといえよう。また古くからの一夫多妻を肯定する立場に立つことは、一貫道のよつて立つ基盤を推測させる一つの手がかりでもある。しかも、この二つのことからいって、一貫道には古いものが強く流れていることがわかる。従つて中共のような新しい行き方をするものに對して、根強い反對態度を持續する理由も、ほぼ明らかになるのではなからうか。

## 五 經濟と布教

一貫道の經濟的な面の事情は明らかでない。しかし佛堂の建立、管理、神童に對する一切の經費はすべて壇主およびその地方の道親の責任とされ、災厄の際の出資を奨励し、善書の印刷も善行の一つとして經典の印刷を各佛堂の自由になかせている。この費用ももちろん出版者の負擔である。従つて中央・地方の諸經費は、ほとんど道徒の寄附によつて賄われていると考えて大過ないであらう。ただそれが毎日寄附を行うのか、不定期か、その額は一定か、個人によつて異なるかなどの具體的な點になるとわからない。多額の場合にその都度募るらしいことは、後述の通りである。定期的な寄附として判明するのは、點道禮の際に求道者があらかじめ納める功德費および供菓費とである。

功德費は、入門料ともいふべきものである。日華戰爭勃發直後には、一・二・三元の三種であつたが、後には三・六・九元となつた。その後も物價の騰るにつれて、次第に騰つていくという。三階級にわけたのは、人々の隨意に任せるためであるが、いくら少くとも最低は出さなければならず、多くだせばそれだけ功德が多いとし、しかも功德費

の多寡によつて信心の眞假をはかり、同時に求道者の功德を行うのを援助するのだとの理屈をつけている。こういわれれば求道者としては、自己のできる範囲内の最高額を出すであらう。功德費と同時に差出すのが供菓費即ちお菓子料である。これはつねに五角である。功德費の使途は、善書の印刷、布教の諸費用および貧困者の救済にあてられることになつてゐるという。點道禮終了後、収入を決算して、點傳師または壇主からその地方の總佛堂に差出すのである。供菓料だけはその佛堂の自由消費に任されているが、彼らの多くはこれまでも總佛堂に差出すのがつねである。點道禮の費用は、一切その佛堂の壇主の負擔であるから、相當多額に上ると考えられるが、發願して佛堂を建立するほどの人々であるから、無畏施として、經費などは念頭におかないのかも知れない。

規定では、功德費や供菓費の他には、原則として金錢を要求しないことになつてゐる。しかし財施がある。一貫道として、病院、小學校の建設、開荒などの善事を行おうとする際には、平素から信心深い道親に寄附を募る。これが財施である。しかし前の二つの場合は極めて少く、大體は開荒である。従つて財施は開荒のための寄附と考えてもよからう。開荒には莫大な費用がかかるが、宏展のためにはつねに開荒する必要があるから、比較的富裕な道親はつねに多額の財施をしなければならないのが實情であらう。Grooteaers 氏の説によると、道親には貧乏人が多いということである。<sup>(37)</sup> だからこそ法施という定めがあり、司茶が行われるのであらう。と同時に、恐らく頗繁になされるであらう開荒の際の財施が澁滞なく行われていることは、相當富裕な人々も道親となつてゐるに相違ないことを推測させる。さきの納妾の垂示、點傳師の納妾の是認は、少くとも妾をおきうるに足るだけの財力ある人々が道徒に相當多いらしいことを思わせる一史料ではなからうか。一貫道の經濟面については、大體以上のことしかわからない。つぎに、布教の方法について述べておく。現在の一貫道を廣く一般に傳えるのは、原則的には點傳師の責任であ

るが、實は道中では、布教の責任を點傳師ばかりでなく、一人一人の道親にももたせている。大體戰亂とか、社會の混亂とか、いわゆる世の中が落着かない時には、えてして救世主なり、力の強いものなり、とにかく自己のたよれるものの現れることをのぞみやすい。その人——もしくは神でも——によつて何か安心感をえたいと考えるのである。

一貫道の一連の教義は、いままでその都度指摘してきたように、たとえば末劫の時に一貫道に入れば救われるとか、扶乩を使うとか、三寶をえれば理天に上れるとか、きわめて幼稚ではあるが、何か人々に安心感をいだかせる一應の機能をもつていのである。だから道親となつた人々は、入道前に比べると、莫大な慰藉と安心とをいだくに相違ない。そうして外功が大功德だと説明されれば、無生老母があづかつている數多の幸福を益々より多く獲得して、いやが上にも安心しようと考えてであらう。そこで彼らは、自己の財産、家、勞力などを惜しまず、あるいは莫大な財施を行い、あるいは遠い地方に行つて開荒に努力するのである。これは實に巧みな布教のやり方である。ほとんど勞せず、しかも經費もかけず、道親たちに教義の内容を説明していさえすれば、自然に一貫道の勢力は盛になつていくのである。道親たちはつねにいう。「自分は前古未曾有の眞寶を幸いにして得ることができた。これを一人だけで享受することは勿體ないから、是非家族や親戚、またはごく親しい友人たちにもえさせてやりたい。もし彼らが全然知らず、入道もしなかつたならば、將來自分だけが理天に行つて老母の許におり、無量の幸福を楽しむことになつてしまふが、こんなことは絶対に忍べるものではない。今生で親しかつた人々とは、理天に行つた時でも親しくしたいと思う」。こうして他人に入道を勧めるのである。だから一人が入道すると、情にほだされて、その家族から親友たちが入道することになる。もし頑強に拒むと、道親は「こんなにいつても、自分のいうことをきかないならば、今後永遠に絶交だ」などという。そこでついに入道することになる。かくて不本意ながら入道した者も、道話をきいてい

る中に次第に信仰度が高くなり、また他人に入道をすすめるようになるのである。ただし、見ず知らずの人には布教せず、親から子、夫から妻のように家族關係を辿るか、親友から親友への交友關係によるだけである。右の一例を通して考えてみると、一貫道の布教方法にはおどす方法と、利で誘う方法との二つがあるように思われる。前者は末劫の恐しさをいうのであり、後者は理天の樂しさをとくのである。ことに現在では幸い普度の時であり、何人でも入道することができ、こんなよい機會はまたとないとか、一人が入道すれば九祖が拔度されるとか——全眞教も同様である——、一貫道關係のものだけが救われるとかいうのである。道親は、他人を入道させることを人生最大の使命と考えているのであるから、時間も金も、甚しきは生命を賭してまで、布教に努めるのである。しかも一貫道は宗教ではなく、孔孟大道であり、白蓮教などの邪教とは全く性質を異にするものだといふから、人々は簡単に入道するのである。また末劫思想は大衆の間によく普及され、人々は何の躊躇もなく入道するわけである。ただこの場合、もし邪教でない孔孟の大道ならば、なぜ非公開にしているのか、なぜ政府の許可をえないのか、という疑問がおこる筈であるし、實際その疑問があるのであらう。一貫道疑問解答中には、政府の許可を得ない理由と、もし政府が干渉彈壓してきたらどうするかという問に對する答をだしている。即ち「一貫道は先天の大道であり、賢良を秘かに度そうとしているのである。昔孔子が列國を周遊して一貫道理をといった時にも政府の許可はうけなかつた。古往今來宗教信仰を許さぬという話もきいたことはない。しかも一貫道は上帝の命じた眞の天道である。従つて政府の許可をうる必要はない。また本道は何の背後關係もないし、人民を愚弄したり、他人の財産を欺騙することもしない。窮理盡性を目的とし、一貫の眞理を追求しようとする道學の一種である。また人を度し、世を救い、惡を善に改めるなど、世をよく

し、人をよくすることを心掛けていただけである。だから政府の彈壓などありよう筈はない。けれども、もし政府が調査に來れば、隅から隅まで調べて貰い、その疑いを解消させることができるようになっていくから、心配する必要はない」と説明している。従つてあまり知識の廣くない農民などは、頭から信用して疑わないで、入道するのである。教義をみると、まことに布教にむくようにつくられているから、要するに一貫道の布教は、人心の弱さを利用して行ふところに重點がおいてあるのである。なお、このように布教に急な理由の一つは歴史の淺いところに求められるであろう。歴史が淺くなければ、このように布教に重點はおくまい。とにかく、この方法は成功して、現存最大の勢力をもつまでになつた。北京の總人口の少くとも一割が道徒だといふから、全體的には相當多數に上るであろうと思われる。

然らば道徒になる人々はどんな階級の人々であろうか。この點については李氏は何も言及していない。恐らく調査ができなかつたのであろう。従つてほとんど不明であるといわなければならない。そうして前述のように、道親はいかなる職についてもかまわないといふから、この點からも見當がつかない。ただその場合、なぜだかわからないが、床屋、足の爪切り、俳優、小使、給仕、妓女だけは除外している。だからこれらの職業の人々は入つていないことになる。一般的にいつて宗教的な秘密結社は、地主、自作・小作の農民、流民、無賴の徒、地方の手工業者、店員、武力のある者などが、その構成員だといわれているが、恐らく一貫道の場合も同様と思つて差支えなからう。Groenlands氏は、道徒には小地主、小商人、農民が多く、それらは概して知識が低く、多くは文盲である。また貧乏人も多いと話されたことがあつたし、烏居龍藏博士から伺つたところによると、燕京大學の門番が道徒だつたという。一方、傳王覺一著の一貫探原の序をかいたのは江朝宗と吳佩孚であり、褚民誼も張天然の點道をうけたといわれている。また

前述のように納妾を點傳師や道親が認めており、納妾のお伺いをたてにくる人もいる。従つて、必らずしも貧乏人や小作などの貧農ばかりではなかつたであらう。恐らく、社會の上下を通じ、都市と農村とを問わず、普遍的であつたに相違なからう。しかしこの教義をきいた場合、よほど非常識な人、歴史に暗い人、あるいはよほど迷信深い人ならいざ知らず、少くとも普通教育をうけた人ならば信じないであらうから、都市のインテリは恐らく道徒の中には加わらないであらう。とくに農村において勢力を張つたというし、<sup>(40)</sup>土地改革に反對し、工場労働者に反共的パンフレットを配つたというから、道徒の中心は主として農村の小地主、富農、中農におかれ、自作・小作の農民、工場労働者、中小商工階級などが大部分をしめ、流民、農村に寄生する無頼の徒などが僅かながら加わつてゐるのではなからうか。しかしこれは單なる推測にすぎないから、實際のところはもつと他の面の者が加わつてゐるかも知れない。なお、中共成立後は、土地改革に不満な人々、國民黨關係の人々も加わつてゐるかも知れないが、この點はわからない。

## 六 經 典

一貫道の經典で目録しえたものは極めて少いので、李氏のあげた書目の中から主なものだけをぬいて、その書名だけを掲げることにする。

一貫淺説

化善靈丹文

一貫覺路

白陽寶筏

一貫道理問答

因果結緣訓

一貫道統條規

回耶教主聖訓

一貫修道須知

血書眞言

一貫道新介紹

初學須知

一貫道疑問解答

明眞仙經

十全救苦篇

明心指南

五教眞諦

皇母訓子十誠

孔孟聖訓

理性淺說

救劫壇訓

醒世指南

醒迷眞言

歷代祖師源流道脈

聖訓集成

還鄉覺路

暫定佛規

勸坤篇

醒世鐘

勸各教徒歸正

醒世妙篇

道脈指南

道理淺言

これらのほとんど大部分は乩示によつてできたものである。なおこの他に他の結社、たとえば同善社、先天道、萬國道德會などの經典をかり用いたもの、佛教、道教などの諸成立宗教の經典を流用したものなどがあり、それらを合

して、李氏は約百三十種の書名をあげているが、各佛堂で自由に印刷してもよいことになっているから、實際には非常な多數に上るであろう。出版所はほとんど天津や青島の崇華堂である。乩訓によるとしてあるものが多いので實際の著者の名は不明である。出版年月は、右に掲げたものはすべて民國二十年以後であるが、年月不明のものも多い。

## 七 結 語

以上、李世瑜氏の調査研究をもととして、現存最大の宗教的秘密結社一貫道の内容の紹介を行つたが、全く文字通りの紹介にすぎず、その性格を深く分析するには至らなかつた。この點は甚だ残念であるが、これまでのべたところをまとめてみると、一貫道はその歴史性を誇示してはいるものの、とくところに矛盾が多く、結局民國十年代の終りに成立した極めて新しい歴史をもつものといえよう。しかしその教義は主として明代におこつた寶卷流宗教のそれをその儘うけつぎ、白蓮教や義和團の影響は稀薄である。従つて一貫道には古さが非常に多くふくまれているようである。いわば封建的なものを基盤にしているといつたらよいであろう。そうしてまたそのために大きな勢力を、僅か二十年の短日月の間に獲得しえたのである。しかしこの場合注意しなければならないのは、民國二十年以後の中國の社會狀態である。いわゆる太平を謳歌する時代であつたならば、いかに末劫來をとき、劫罰の烈しさをいっても、人々は決してついてこなかつたであろう。その教義が布教に便にできていたとしても、布教對象がそれを受容しなかつたであろう。しかるに一貫道は大きな勢力となることができた。民國十七年に張天然が教を掌るようになったとの説があることは、本文中でのべたとおりであるが、日本軍の手によつて張作霖が鐵路の露と消えたのは、あたかもその年



のことであつた。爾後日本の中國に對する經濟的な進出は急速度となつた。その影響は華北の農村にもおよんだであらう。日華の政治的・經濟的な争いが深刻の度を加えるにつれて、次第に農民の身邊にもある種の變化がおこりはじめたのではなからうか。また都市の工場労働者の生活についてもほぼ同じことがいえるであらう。しかも紛争はついに日本軍の軍事行動となつて爆發した。これを劫の實例としてとけば、その被害をうけた者やそれをきき傳えた者は一貫道に入道する氣分が強く動くであらう。民國三十年に山西省民の八十%が一貫道徒となつたというから、日華間の軍事行動と一貫道の勢力の消長との間には、何らかの關係が認められそうな氣がしてならないのであるが、現在の私としてはよくわからない。一應疑問として提出して博雅の示教を俟つ次第である。

また、現在最も強力にかつ根強く中共に對して反對している宗教的秘密結社は一貫道であるが、なぜそのように強く反對するのであらうか。この點についてもよくわからないが、一つの推測は、道徒の中心が農村の小地主におかれているという點からでてくる。一貫道が土地改革に反對のスローガンを出したといい、民國三十六・七年のころ、中共軍の北京進攻を末劫來として、その準備をしたと傳えられるところからみれば、たとえ國民黨の後押しがなくても、一貫道は反共態度をもつていたと考えざるをえない。それは地主など封建的な經濟機構をよしとするものを道徒の中心にもつていたからに他ならない。そこで土地改革に極力反對するのである。だから羅瑞卿らがいうごとく、一貫道は封建勢力を代表するものの一つだということができよう。しかも農民たちの意識は、一貫道のあまりにも多愛ない教義を無批判にかつまじめに受容するほど、非常に遅れているのである。だから彼らは告示にでたところには、きわめて柔順に従う。そこを利用して反共的にでているといえるのではなからうか。土地改革は、現在一應成功裡に終了したといわれている。一貫道の昨今の状態については知る由もないが、事實完全に土地改革が終つたとすれば、恐ら

く一貫道の勢力は漸次衰えているのではなからうか。しかし中國民衆の意識は、李氏の調査を通してみると、必らずしも高いとはいえない状態である。しかも一貫道の中共に對する反抗はいまだに續いているようである。結局中共のいう大衆的科學的文化の確立方法が、將來の一貫道の運命を卜するものであらう。

昭和二七・一二・一〇

〔附記〕 本稿は研究所へ提出すべき研究報告の一部であるが、草するに當つて Rev. W. A. Grootaers. 古岡義豐・大淵忍爾の諸氏から、多大の便宜と助言をえた。記して感謝の意を表わす。

- 1 W. A. Grootaers: Une Société Secrète Moderne I-Koan-Tao, bibliographie annotée: Folklore Studies, Vol. 5, 1946. P. 316.
- 2 李世瑜「現在華北秘密宗教」緒論八頁 (Studia Sinica, monographs, Series B, No. 4)
- 3 拙稿「中共の宗教政策と民衆道教」(東洋文化第十一號) 參照。
- 4 東方宗教第二輯、資料紹介參照。
- 5 陳致虛撰金丹大要卷一(道藏第七三六冊)、王禕撰青巖叢錄等參照。
- 6 趙道一撰歷世眞仙體道通鑑卷四九(道藏第一四八冊) および逍遙墟經卷二(道藏第一〇八一冊)に傳あり。
- 7 馬丹陽の主な傳は、王利用撰「全眞第二代丹陽抱一無爲眞人馬宗師道行碑」、張子翼撰「丹陽眞人馬公登眞碑」(以上甘水仙源錄卷一)、金蓮正宗記卷三丹陽馬眞人傳、金蓮正宗仙源像傳丹陽子條、歷世眞仙體道通鑑續編卷一馬鈺傳、逍遙墟經卷二馬丹陽傳、(以上道藏本)、王圻撰續文獻通考卷二四三等にあり。
- 8 かくの如く諸書によつて記述がまちまちなことは、王覺一が一貫道と直接の關係がなく、のちに古い傳統を誇示するために考えたされた附會であることを表わす一證であらう。

9 李世瑜「現在華北秘密宗教」所引による。

10 私がみた一貫概言は、民國二十五年三月の序のある吉岡氏所藏本であり、李氏がみたのも民國二十五年刊本である。いづれにせよ、出版されたのは王覺一の時代ではない。

11 同書第一篇第三章第一節による。

12 陳捷著義和團運動史第一篇第三章第二節による。

13 李氏の所引による。

14 李氏所引の周明道著揭破一貫道邪教惑人秘密による。

15 李氏も張天然を創立者と考えている。ただし Grooteers 氏は十九世紀の終りに王覺一が山東で創立したといわれる（註1 同書）。

16 Grooteers 氏は、張天然は若年のころ濟寧、濟南にいたから、義和團員だったかも知れない。團員ではないにしても、何らかの關係は必らずあつたであらうといわれる。傾倒すべき卓見であるが、それを實證することは、いささか困難である。一貫道の内容からいえば、本文にのべた通り、あまり關係がないようにみえる。しかし双方の經典を仔細に比したならば、或はその關係を確めうるかも知れないが、現在では不可能である。

17 大正新修大藏經第十四卷四二一頁所收の竺法護譯本によつた。

18 佛祖統紀卷四十二、五代梁末帝貞明二年條および佛祖歷代通載卷十七、後梁末帝貞明丙子條にみえる。本文の偈は佛祖統紀所載のものをとつた。佛祖歷代通載の偈とは多少の異同がある。

19 茶香室叢鈔卷十三、豬頭和尚是定光佛および宋太祖是定光佛轉世の各項參照（春在堂叢書本）。

20 私のみたところでは本文にのべた如くであるが、彌勒教の亂の宗教的な面についてはよくわからないので、博雅の示教を俟つ。

21 收源教は破邪詳辯卷一、黃天教は同書卷二、紅陽教は同書卷三にある。同書は目睹しえなかつたので李氏の所引に従つた。

なお同書のくわしい解説は吉岡義豐氏著「道教の研究」第一章六頁以下にある。なお傳惜華「寶卷總錄」(漢學論叢七四頁、一九五一年刊)には、無生母收緣卷という民國刊本の名があげられているが、これも三期末劫思想の關係の寶卷であろう。

22 李氏の所引による。

23 常盤大定博士著支那に於ける佛教と儒教道教六一二頁以下参照。

24 道藏第六四〇冊所收。

25 朱子語類卷一二六、釋氏の項による。

26 華陽陶隱居内傳卷上(道藏第一五一冊所收)にみえる。

27 宋濂「書劉真人事」(宋學士文集卷五五所收)参照。

28 拙稿「金・元時代に於ける道教の概説」(北亞細亞學報第二輯所收)の眞大道教および太一教の兩項参照。

29 全眞教の清規については、拙稿「道教の清規について——外來文化と固有文化——」(東方宗教叢刊號所收)参照。ただし

該稿の明代の部分には不足があるので、機をみて訂正したいと考えている。

30 全眞教團のくわしい性格については、拙稿「金元時代の道教々團の性格」(和田博士還曆記念東洋史論叢所收)を参照されたい。眞大道教團についても多少ふれてある。

31 塚本善隆博士「羅教の成立と流傳について」(「東方學報」京都第十七冊所收)、吉岡義豐氏著「道教の研究」第一章。澤田瑞穂氏「羅祖の無爲教」(東方宗教叢刊號および第二號所收)、および酒井忠夫氏「中國民衆の宗教意識」(中國研究第一號所收)。

32 東方學第六輯に掲載される筈の拙稿「キリスト教の傳來と中國の習俗」参照。

33 橘樸著、中野江漢編註「道教と神話傳説」第一章六頁による。

34 呂洞賓の略傳については拙稿「王重陽の遇仙説話に就いて」(東亞論叢第六輯所收)参照。

35 Grootaers 氏のみた鼎器は丁字形で、長い方が柄で、上の棒にあたるものの右の端に短い棒がつき、それでかいたとの話で

ある。

36 吉岡義豊氏「道教の招訣（印契）に就いて」（大正大學報第三八號所收）参照。

37 直接私に説明されたところによつた。Grootaers氏は、大同、萬全、宣化などの地方を調査されたから、恐らくこの地方の一貫道の状態であらう。

38 吉岡氏は「道教の研究」の中で（四四頁）、中國の民衆が現在でも末劫思想を信じている例をあげておられる。

39 Taoist Secret Societies: China Missionary Bulletin, March 1951. による。昨年一月に北京の總人口は約二百萬といわれる。その一割というから、北京だけで二十萬の道徒がいたことになる。また Grootaers氏の話によると、民國三十年には山西省民の八〇%までは道徒だつたという。もつてその勢力の程がおしはかられよう。

40 註1同書。

追記 本稿を草し終つた後、酒井忠夫氏より、一貫道徒中には先天道、哥老會のものが入つていると考えるべきではないかとの示教をうけ、吉岡義豊氏よりは、日華戦争中日本軍が經濟的に一貫道を援助したらしいとの示教をうけた。

